目次

一、　巻頭の言……………………………………2

二、　特別寄稿……………………………………3
成山哲郎先生……………………………4
大森竜一先生……………………………6
佐藤忠之先生……………………………7
酒井進之介先生…………………………9
宇田川哲哉先生…………………………10
谷繁強志先生……………………………13
堀下直人先生……………………………15
宇都宮正敏先生…………………………18

三、　加盟校紹介…………………………………21
金沢大学…………………………………22
京都産業大学……………………………25
近畿大学…………………………………28
国士館大学………………………………31
上智大学…………………………………34
成城大学…………………………………37
専修大学…………………………………40
中央大学…………………………………44
東京大学…………………………………47
東京医科大学……………………………50
富山大学…………………………………53
明治大学…………………………………56
早稲田大学………………………………59

四、　特別企画―一問一答―……………………63
1．合気道を始めたきっかけを教えてください。……64
2．座右の銘を教えてください。……………70
3．合気道をしていなかったら何をしていたと思いますか。……77
4．学生に一言お願いします。………………82

五、　加盟校連絡先………………………………87

六、　歴代幹部名簿………………………………89

七、　全日本学生合気道連盟規約………………97

一、巻頭の言

全日本学生合気道連盟
第六十六期連盟委員長　矢﨑　快

弊連盟の機関誌「連盟誌」をお手に取ってくださり、まことにありがとうございます。

おかげさまで本年も無事に発行することができ、第五十三号という大きな歴史の一片の御挨拶をさせていただくことと相成りました。本誌に御寄稿くださいました先生方、ならびに加盟校の皆々様方にこの場を借りて御礼を申し上げます。

弊連盟の存在意義とは、〝流派の垣根を越え、各加盟校同士が相互に交流すること〟であります。

この意義とは、裏を返せば各加盟校それぞれの文化があることを前提としており、その上でお互いを尊重するという精神があって初めて成り立つものと言えると考えております。加盟校同士の関係は「異文化」と表現できるかもしれません。

様々な文化・環境が違う相手と相互に理解しあうというのはたいへん難しく、並大抵の努力では達成できることではないと考えております。それにも関わらず今年で六十六代と長らく弊連盟が機能し、各大学が各大学とともに合ってきたことを嬉しく思うと同時に、単なる交流の場に止まらぬ、この「相互理解」の場としての連盟の益々の発展、ひいては合気道そのものの発展を願う次第でございます。

昭和から平成、平成から令和と時代が変わるとともに、人々や社会のあり方も変わっていきました。

弊連盟も例に漏れず、時代とともに変わっていくことが予想されます。「異文化との相互理解」という共時的な視点と、「時代とともに変化していく」という継時的な視点の両点から存在を問われることになるでしょう。

旧套墨守を慎みつつ、しかしその存在意義は揺るがぬままひとつまたひとつと同士たちが歴史を刻み、新しく善い形になることを期待しており、またその達成のためにも我々連盟幹部一同、孜孜として努力を続けて参ります。

最後に、各大学の先生方、加盟校の皆様方、私を立てて支えてくれた六十六代幹部各位、その他弊連盟の関係者の皆様方に感謝を伝えるとともに、〆の言葉とさせていただきます。

今後とも全日本学生合気道連盟をよろしくお願い申し上げます。

二、特別寄稿

成山哲郎先生

（ＮＰＯ）昭道館合気道連盟師範

「今後の目標」ついて（昭道館合気道道場創設五〇周年記念誌より）

小林（裕和）先生も「成山哲郎氏には植芝盛平直伝の合気道を教えている」と第一回の全国社会人大会のパンフレットにも書いてあったでしょう。富木先生にも小林先生にも教わったけれども、みんな植芝先生の影響を受けているわけです。富木先生も小林先生も植芝先生の直弟子には違いないわけです。複数の先生から指導を受けた合気道家はあまり多くは無い。だから両先生の指導を受けた私は「富木、小林両先生の合気の技の融合」、「植芝盛平翁直伝の合気の技の再現」をし、わかりやすく次に続く人たちに伝えていきたいと思います。それが私の仕事だと思います。

例えば剣の理合を手刀の崩しとしてまとめた後の先の崩しのやり方は、小林先生の技にあてはめることは可能なわけです。小林先生の技を後の先の崩し無しに説明するのは難しい。富木先生が、基本の理合をまとめてくれているわけですよね。小林先生の技へ当てはめればいいわけです。

入り身投げでも上にぶん投げるのではなくて一瞬下に崩すので投げられる。パッと引きつけ、仏壇返しというかね、呼び戻しって言うかね。こういう風に今なら小林先生の技を解説できます。

小林先生は「技は説明したらそこで終わってしまう」と言っていました。「言った瞬間に終わる。植芝先生が技は口や筆には記せない」と言われたと。「日々進化するんだ。だからわしが死ぬ前が一番強いのだ」とね。しかし、そこまで修行できない人には教え

てあげたらいいと思います。先生の世界に到達しなくても先生の方向に向かうようにできるというのは大切なことだと思うのです。そのためには基本という一番大切なエッセンスが必要なわけです。

富木先生は戦前戦中、満州にいながら本土の武道や体育関係の雑誌へ投稿していました。その内容は今でも国会図書館で見ることができます。それらは現在合気会が行っている内容をほとんど含んでいました。開祖植芝盛平翁の草創期に側に仕え指導を受けた内容を、剣術や講道館柔道の経験を基に相当な分量でち密に理論的に表現していました。満州の憲兵警察官への教本でも「合気武術は我が国伝統の武技にして内容的には剣柔両道の根本原理に立脚し形式的には競技的規約条件に拘束せられさる純粋武道の立場にあり、その練磨の核心は短剣軍刀銃剣等の使術に一貫する根本原理の把握にあり、又それら使術を基礎としての統一運用にあり。いわゆる「体即剣」の妙用の体得を以て目的となせり。故に之を学ぶ者直に日本武道の真髄に触れかつ既習の柔術、剣術、銃剣術等においても一層の威力を発揮し得べきことを疑わざるなり」「合氣武術教程」富木謙治著と述べています。戦前から武道の根本原理、日本武道の神髄に即した合気武術として教本を作成していました。そんな過程を経て今のシンプルな基本があるのです。

普通は一人の先生から教わります。一人の師匠につくとその師の影響しか技に出ない。しかし幸い私は富木先生、大庭先生、小林先生に教わりました。大きな組織、多くの道場生をお持ちになった先生方で多くの人が、その実力を認めているわけです。複数の先生に習った結果、技には共通点があることがわかりました。お互いの技の中で共通のものを探して植芝先生の技に近いものを再現する。植芝先生の技を失わないようにしてわかりやすく後に続く人に伝えることが私は大事だと思うのです。

大森竜一先生

（ＮＰＯ）昭道館合気道連盟師範

地球の歴史において、人類は様々な文明をつくり出しては滅んできた。滅んだ理由としては、自然災害によるものや他文明からの侵略によるものなど理由は多々あるが、共通していることは、それらの文明が意図して滅んだわけではないということである。

さて、現在の人類の繁栄はというと、地球規模で言えば人口は困ったほどに増加傾向にあり、科学の発展は大昔とは比べ物にならないほどの超発展といえる。しかしながら一方では、飢餓で苦しむ人々が世界各地におり、戦争で命を落とす人も大勢いる。また、色々な要因が重なってのことだとは思うが、多様性という考え方が尊重されることにより（多様性の考え方そのものを否定しているわけではない）新生児の数が減り続けている国も数多くある。人口問題、地球温暖化によると思われる様々な被害、戦争問題。果たして人類は人類存続という意味において本当に発展してきているのだろうか。

人は心と身体のバランスが崩れれば体調を崩すわけだが、医者にかかれば直ぐに治してもらえる。では人類が地球のバランスを崩している現状を治してくれる医者はいるのだろうか。

人類は英知によって地球上の生物の頂点に立ったわけだが、アンバランスな英知のために今まさに地球を破壊し続けている。今後の地球の未来はこれからの人類の英知にかかっている。私を含めて古い人間は頭が固い人が多い。若い世代の皆様に、これからの人類を、これからの地球の未来を託したい。

佐藤忠之先生

日本合気道協会師範
早稲田大学合気道部師範

歴史観を考える

我々にとって歴史という情報は、新しい歴史つまり最新ニュースも含めて、客観的に知った内容を自身の脳で組み立て直して想像し、心で咀嚼吸収し、それを基に広く時間の流れとして掴んでいます。

そんな学習を我々は知らず識らずのうちにしています。が、しかしその事実が真実なのかどうか？　はたして本当の史実なのだろうか？　と詰問してみると些か曖昧です。真の歴史の把握、情報把握とはなかなかに難しいようです。

過去から現代まで、実は自分自身が確かめたわけではないものを、文書口述記録にあるからと、それを信じて学習しておそらくそうであったろうという集合情報をもって自身の中に知織化している。それが我々の歴史情報処理の実態だと言えます。

ところが近年、昔、習ったこの実態歴史が史実とはかなり違っていた！と新史実が紹介されたり、また、訂正されている現実も少なくありません。

どうやら実態は常に必ずしも＝真の実体ばかりではないようです。

そう思うと自分自身で真実に出会うにはどうしたら良いのか？　いわゆる偏らない目と心をどう持ち得るか？　さらに偏らないとは？　その中心軸とは一体どこに求めれば良いのか？

そうした考察を持ち続けることが大事なのかもしれません。私は改めて考えさせられています。

宮本武蔵の五輪書に曰く、「見の目よわく、観の目つよく」の訓えの、とくに「観の目」を心のうちに静かに求めて、自然体と無心で実態を見直してみる。慌ただしく揺れ動く心理でははたして観の目は働きますまい。明鏡止水の心眼でなければ実体を見失うぞよ！と、改めて諭され、この歳になって新鮮な現実を教えられています。幾つになっても新たな発見をさせてもらえる事は幸いな事です。

酒井進之介先生

（NPO）昭道館合気道連盟師範

二〇二五年五月三一日～六月一日まで、ロシア・モスクワでInternation Aikido Games 2025が開催されました。本大会に京都産業大学体育会合氣道部師範である松尾正純先生からのお誘いに基づき、参加させて頂きました。

大会には二十一ヶ国（アブハジア・アゼルバイジャン・ベラルーシ・ブラジル・ガーナ・ジブチ・エジプト・インド・カザフスタン・カメルーン・キルギスタン・中華人民共和国・コートジボワール・モンゴル・ロシア・セルビア・タジキスタン・チュニジア・フィリピン・スリランカ・日本）から参加選手二百二十五名、この他に役員、競技役員、セミナーのみに参加した合気会稽古生も多数おり、国際規模のものとなりました。

日本からの参加者は最終的に松尾先生と京都産業大学体育会合氣道部の福原大稀コーチ、そして自分の三名でした。この情勢下にあっては致し方ないところがあるかも知れませんが、武道が政治の影響を受けない日がくることを願うばかりです。

大会期間中にはセミナーと競技が行われました。何よりも様々な合気道団体が一堂に会することに意義があったと改めて感じた次第です。

また、今回の大会ではセミナーを行う機会に恵まれました。様々な地域の指導者や稽古生とやり取りを行うこともできたことを感謝しております。

宇田川哲哉先生

明治神宮武道場至誠館館長
中央大学合気道部師範

禊行のこと

至誠館では「禊行」を大寒の時期と秋の演武大会の翌日などの折々に実施している。毎回五十名以上の参加があり、学生や門人の関心の高さが窺える。我が国でも貴重となった武道を志す者であるからなのだろうか。

日本の武士は、毎朝起きると直ぐ禊行をし、月代（さかやき）と髭を剃り、髪を整え、首を取られたときに見苦しくないように鬢を付け、香を焚いたらしい。江戸時代の平和な世の中になっても、禊を済ませてから神前や仏前で武術の稽古鍛錬をし、登城し仕事に就いたと聞く。

武士は、神道や仏教を崇敬していた。明治維新より前には、神仏習合であったことからも、神道の考えは根強く浸透していたことであろう。例えば、源氏は八幡宮そして平家は厳島神社の御祭神を信仰していたことが有名である。源頼朝の祖先である源頼義が相模守に任じられて鎌倉に移り住んでから、河内源氏の守護神である石清水八幡宮を分霊し、鎌倉に勧請して創建されたのが鶴岡八幡宮である。以後、鶴岡八幡宮は鎌倉武士の守護神となる。

何故、武士は神を信仰するのか。

武士とは、必要にあっては人を殺傷する仕事である。元々日本の生活に密着している神道では、殺傷すること（仮令必要であっても）は穢れとされている。武士は、その穢れを身に纏う仕事で

あるということを自覚しているからこそ、神を敬い、禊をし、穢れを祓おうとしていたのであろう。

禊とは、人は誰しも生まれてからいつの間にかついてしまった「諸々の禍事(まがこと)・罪(つみ)・穢(けがれ)」を自ら祓い清める神事である。日常生活の中、毎日のように風呂に入り、体を洗うということにも通じている。身を清める（身削ぎ(みそ)）だけではなく心の本体であるとされる「霊」を清めていくことに意義がある。自分に水を注いでいくことで悪い霊を削いでいき(霊削ぎ(みそ))、そして良い霊を注いでいく（霊注ぎ(みそ)）ことが肝要である。

これは伊邪那岐大神(いざなぎのおおかみ)が穢れてしまったときに禊した際、初めは身についた穢れを落とし、神々を生み、最後に天照大御神(あまてらすおおみかみ)、月読命(つくよみのみこと)そして須佐之男命(すさのおのみこと)の三貴子が産まれたという日本神話が始まりとされている。

ここでは、至誠館が明治神宮で行っている禊行の様子を簡単に紹介しよう。

日の出前の暗い中、白鉢巻・道着姿で至誠館から明治神宮内にある禊場まで特別の許可をもって全員で走って向かう。禊場に到着し、畳の部屋で祓詞を奏上しているうちに、空が明るくなってくる。

脱衣し、男子は白鉢巻・白褌、女子は白鉢巻・白衣となり、神苑の木々に囲まれた禊場前庭に出る。そして、道彦（先導者）を中心に輪になり、「祓戸大神(はらえどのおおかみ)」と連唱しつつ禊行が始まる。

「振魂(ふりたま)」両手を臍下前方に右手を上に掌を組合せ、連続して上下に振り動かす。この振魂は、禊行の所作の合間に入れていく。

「鳥船(とりふね)」　三首の和歌（ときには明治天皇御製）を唱えながら和船を漕ぐ要領で行う。先ず左足を前に踏み出し、両手を前下方に突き出して握り、引き寄せては突き出す。

朝夕に　神の御前にみそぎして　すめらが御代に　仕えへまつらむ

イーエッ　エーイッ

次に、右足を前に踏みだし鳥船を行う。

遠つ神　固め修めし大八洲　天地共に　とはに栄えむ

エーイッ　ホッ

次に、左足を前に踏みだし鳥船を行う。この際は、両手を前に突き出すときには両手を開く。

天津神国津神たちみそなはせ　思ひ猛びて　我がなす業を

エーイッ　サッ

「雄健（おたけび）」　両手を腰に当て、道彦の発声に続き、「生魂（いくたま）・足魂（たるたま）・玉留魂（たまたまるたま）」（生成発展・充実具足・統一主宰）と唱える。

「雄詰（おころび）」　左足を前に踏みだし、左手は腰に当て、右手は人差し指と中指を立て眉間の辺りに構え、「国常立命（くにのとこたちのみこと）」と唱える。次に、イーエッ　エーイッの気合とともに右手で空間を斜左下方に斬り下ろす。（三度反復）

「気吹（いぶき）」　両手を広げて大気を静かに腹中に収め、次に両手を頭上で組み、徐々に下げ、上体を屈しながら、静かに息を吐く。（三度反復）

これらの所作を進めていくと、早朝の澄んだ空気を吸うととても清々しい気分となると共に、気持ちが昂ってくる。

「身滌（みそぎ）」　禊場の中に入り、水が満杯に張られた水槽の前に立ち、振魂、鳥船を行った後、徐に水槽の水を桶に汲み、その水をじっと眺める。その冷水と対立するのではなく、その冷水と一体となるよう和していくような心構えが大切だ。そして、イーエッ　エーイッの気合と共にその水を浴びていくと、切り裂くような冷水が参加者全員の熱気により白い湯気を発し、禊場の窓が次第に曇ってくる。一人ひとりの細胞が活性化するように皮膚が紅潮し、顔つきが厳しくなり、気力が充実してくる。

三回の身滌行を行うと満杯だった水槽の水は底をつく。そして手締めでの、「おめでとう」の発声と共に禊行を終えると皆の顔がすっきりとしたようになっていく。更には、研ぎ澄まされた感性を身に纏う気がしてくる。

その後参進して明治神宮の大前を拝し、至誠館に向かうと、途中の西の芝地には、ちょうどその時間に太陽の光が降り注ぎ、太陽の温かさに包まれた感じになっていた。

当連盟の学生諸君も、まだ禊行を経験していない人は、一度試してみるのも良いだろう。

谷繁強志先生

早稲田大学合気道部師範代

問題と課題

世の中不透明な時代であり、問題と課題があふれかえっています。合気道と勉学に明け暮れる毎日を過ごす皆さんもそれぞれ問題と課題を抱えているのではないでしょうか?自分自身を成長させるのにこの問題と課題をしっかり認識していくことが大切です。時に問題を課題と捉えたり、逆に課題を問題と捉えたりと問題と課題をごっちゃにしてしまうことがあります。問題とは何か、課題とは何か整理してみましょう。

まず、「問題」です。英語で言うProblemです。解決・改善しなければならない事象です。それは、目標達成の障害となっていることでもありますし、放っておくと現状を悪化させてしまうものです。従い、問題をしっかり把握せねば、成長できないし、目標達成もままならず、現状維持すらできません。合気道を通して日々研鑽している学生諸君が抱える問題は何でしょうか?例を挙げて問題把握の手順を整理しましょう。

① あるべき自分の合気道をはっきりさせます。自分が何を目指しているのか、どうありたいのかを整理しましょう。理想がなければ、改善すべき点は見つかりません。

自分自身の合気道の技について、取り組む姿勢について、上級生は指導のやり方について、それぞれがあるべき状況(理想)を普段から意識すべきです。書き出してみましょう。

② 日々の稽古においてあるべき姿と実際とのギャップを見つけましょう。そのギャップが問題点です。
書き出した理想の状況と現実を比較し、何がどのように理想とかけ離れているのかを分析します。より具体的に詳細にそのギャップを把握せねばなりません。

次に「課題」です。
問題点は単に理想と現実のギャップでしかありません。そのギャップをどうやったら埋められるか、埋めるために講じる手段が課題です。「技のスピードを増すこと」というのは一見課題のように見えますが、技のスピードが足りていないという問題点を言い換えているだけです。技のスピードが足りていない（＝増す）ためにやらなければいけないことが課題です。例えば、「技のスピードが足りていないので、瞬発力を増す為に足腰を強化すること」というのが課題となります。問題把握段階でできるだけ掘り下げておけば、具体的な解決手段が考え易くなります。上級生の指導方法であれば、下級生の上達にばらつきがあると言う問題がある場合、「下級生の上達にばらつきがないようにする」というのは課題になっていません。ばらつきがあるという問題を細分化（要因を細分化）すれば、稽古時間の違いがあるという問題に気がつきます。そのように問題を細分化、深層化した上で自分たちは何をすれば良いのか考えましょう。「稽古時間の差を埋めるために空き時間に稽古できるよう皆で調整する」という課題を設定することができます。課題には具体的に何をするのか、それによって何が改善されるのかが盛り込まれているとわかりやすくなります。

問題とは、目標達成の障害となっているもの、課題とは、その障害を取り除く為の手段・アクションです。問題を整理し、それをどのように克服するのかを課題として設定し、取り組むことで自分自身及びチームを目標に向かって成長させて行ってください。

堀下直人先生

東京大学運動会合気道部師範
学習院中等科古武道部師範

意味ある稽古

合気道をやっているくらいだからどこか職人に対する憧れのようなものがあり、わたしの仕事に対するイメージはもともと、決まったことを毎日毎日丹念に繰り返すうちに、目指すべき姿の輪郭がほのかに浮かび上がってきて、時間とともに強く輝きを増す理想に近づいていくという、静的なものであった。仕事の上での人間関係も無理する必要はなく、お互いをよく知る人たちの間で、時に忍耐と妥協を重ねながら、徐々に理解と信頼が深まっていけばよい、と考えていた。

実際はどうかというと、職業合気道家ではないわたしは普段の生活の大半をオフィスでの業務に費やし、変転する環境に引きずられながら、予測不可能な状況への対応と判断とを迫られている。しかもその変化のスピードとマグニチュードが尋常ではなく、経験と想像を超えた(ように自分には感じられる)事態が毎日のように起こるわけだが、そのような中で真っ先に必要になるのは、眼前に提示される膨大な情報のうち、あとあと重大な結果につながる可能性のある事象と、そうではない事項とを即座に区別し、何とか及第と思われる処置を行い続ける感性と気力である。一時間席を外しただけで溜まってしまう何十通もの未読メールに戦々恐々としつつ、早朝や深夜も含めた次の打ち合わせに身構え

る間に、これまで身につけたスキルと枠組みは陳腐化し、日々新たなことを走りながら身につけ実践していかなければならない。しかも四半世紀前であれば引退を間近に控えていたはずのわたしの定年は、蜃気楼のように先に先に遠ざかっていく。

だがいつの世も人は、それぞれの立ち位置で時代の最先端を生きている。果てしないルーティンの繰り返しに見える牧歌的社会は実際には自然や疫病、外敵による不安定要素に満ち溢れていたし、程度の差こそあれ、どの時代に生きる人間も変化から逃れることなどできなかった。ましてや常にお互いの腹を探り合い、隙あらば相手の裏をかく戦いの場は言うまでもない。結局は外部環境の変化を所与のものとした上で、本質的で根源的な価値を変えずにいられること、換言すれば変わらないために変わることが重要になる。

現代人が一日に触れる情報量は江戸時代の一年分、平安時代の一生分といわれる。それでは千年以上にわたり継承されてきた日本の伝統的な武道武術も、既に消費期限を過ぎたものとして通用性を失ってしまったのだろうか?

武道の特徴は、生き方や実生活との連動にある。武術は戦いのための技術であるが、今を生きる人間にとっての戦い、そして武道武術の価値とは何か?それは四〇〇年前から繰り返されてきた問いでもある。有効な技法の獲得、強壮な体力と気力の涵養、戦いに臨んでの心の持ちよう、戦いを避けるための戦略、戦わねばならない時を見定めること、自分の価値を見出し実現すること…。そうした数多くの命題の中で、変化への感性もまた、武道のひとつの大きなテーマであった。

実際、合気道をはじめとする日本の伝統武道には、相手や周囲の変化にわたしたちが対応するための叡智が多く示されている。個別の技法はもちろん、それを十分に活かしうる心身の状態、予期しない状況に対応できるバランス、敵見方の見分け方、間合い、拍子、気迫。敵を前に浮足立つことなく自己の置かれた環境を冷静に分析し、自己の守り獲得すべき価値を見極め、優先順位をつけ、自分の動きを阻害する要素(身心のこわばり)を徹底的に排除すること。

このような実践的な対応力を身につける上で本当に意味をもつのは、徹底した基礎の構築である。目先の派手さや格好良さは実際の戦いには役に立たない。相撲の稽古が四股、摺り足、鉄砲に終始するように、傍目からは単調な動作の反復にすぎないものが、心を砕いてそれに打ち込むことにより単調なものでなくなった時、その人の意識と人格、身体にわずかな差異をもたらし、それらが積み重なっていつしか変化に対応する、あるいは自ら変化を巻き起こす上での強固な地盤が形成される。答えやゴールがあるわけではない。ただ、今より正しいありかたに向かって身心を練っていくだけである。

学生時代の貴重な時間を割いて行う武道稽古は、将来の自分にとって役に立つものであってほしい。幸いなことにわたしは自分

の時代において、有用で価値の高い教えを先生方に与えていただいた。

だが、皆さんが生きる時代は違うかもしれない。不確実性はどんどん高まっている。行き過ぎたグローバリズムとリベラリズムへの懐疑論が、進むべき方向性を見定めないまま、グロテスクなモンスターのように予想しない形で膨張し、暴れ出している。自分がイメージする人生を歩めていないという被害者意識が拡がり、余りにシンプルに他者を抑圧することに代償価値を見出す。ルールを決めるのは一部の大国、強国であって、そうでない国は唯々諾々と後出しじゃんけんに従うしかないという、一〇〇年前と見まがう稚拙な議論が大手を振ってまかり通る野蛮な社会を、正気を保って気高くしなやかにわたっていくにはどうするのか。胆力を持って思考を続けること、自分の考えが本当に自分のものなのか批判的に問いかけること、そしていま必要なことを見極め、前に一歩踏み出す勇気を持つこと。それには時間によって鍛えられ、一貫した目的意識に支えられた稽古が必ず役に立つ。変わらない自分であるために変わり続けること、正しく生きるための気蓋と自恃を強くすること、その一助になるような稽古を指導できるよう、自分自身も精進していきたい。

宇都宮正敏先生

養神館師範
京都産業大学合氣道部師範代

「私の師匠」

連盟誌第五十三号が発行されるにあたり、今回初めて寄稿文のご依頼をいただきました

さて、何を書こうかと先ず思い浮かんだのは私の合気道の師でした。まず師について語らねばならないと思いました。

私の合気道の師は寺田精之先生、松尾正純先生のお二人です。両先生に初めてお会いしたのは私が大学一年生の前期夏に入る前の頃、京都産業大学の第二体育館での稽古に指導に来られた時でした。体育館裏口で学生が整列し先生をお出迎えした時、タクシーから降りられた寺田先生は小柄で白髪の只ならぬ雰囲気のお爺さん、その後ろに控えるのは眼光鋭くギラギラとしていて、何とも言えぬ闘争心の塊のような雰囲気を出されたボディーガード。その様な異様な雰囲気の中、両先生に向かって全力の礼と「押忍」の挨拶。今まで部の中で先輩に対して行ってきた礼儀作法はこの時に発揮するものだと言わんばかりの緊張感の中、稽古が始まりました。稽古が始まると寺田先生は周囲の学生の様子を見ながら、松尾先生が実際に学生に対して技をかけられていく流れで稽古が進んで行きます。学生同士で稽古していた時は強く技も綺麗な先輩に憧れていましたが、その強い先輩が松尾先生の前では子供をあしらうかのように技をかけられ吹っ飛んで行く様子をみて、「自分も松尾先生のように技ができるようになりたい。」

と、合気道への気持ちが強くなったのを感じました。以来、稽古中やそれ以外の時間も松尾先生が来られた時は、技の質問をおこない少しでも上達したいという熱意で臨んでいました。その気持ちに松尾先生は畳の外でも、廊下でも喫茶店でも所かまわず、技の質問に対してはすぐに返答して、身をもって示してくれる情熱の溢れる先生なのです。

寺田先生は松尾先生とは対照的で物静かな雰囲気で技の質問をしても「それでいいんだよ」と一言仰るだけで、決して「違う」と否定されたりする言葉を出されることはありませんでした。学生にとっては、否定されないことで、自信をもって稽古することでできていたのではないかと、今では思っています。寺田先生は「綺麗な技よりも効く技を」と仰っていました。また、「学生が楽しめるように」と稽古中に相撲や騎馬合戦をしたり学生の気持ちになって稽古の内容を考えておられました。

私はお二人の先生に習うという貴重な経験をしました。その経験を学生の中で終わらせず、社会人になっても続けてみたいと思い今も稽古を続けております。社会人として働きながら合気道をするのは大変だと言われることが多いのですが、私にとっては、合気道が中心でその中に仕事があると思っています。そのため、仕事や家庭の中でも合気道の精神を実践することが何よりの稽古であると感じています。お陰様で私の後輩も社会人として合気道を続ける人が増えてきています。ありがたく感じると共に寺田先生・松尾先生の合気道の技を伝える重責を日々感じています。

三、各校紹介

金沢大学

主将作文

金沢大学体育大会合気道部　主将　藤江敦也

私たち金沢大学体育大会合気道部は、週四回、約二時間の稽古を行っている。現在、現役部員は約二十名で他の大学に比べて多くはないが、平日にも関わらず、多くのOBの方々に稽古にご参加いただいているため、毎回内容の濃い稽古を行うことができている。そして、土曜日の稽古では師範の先生からご指導をいただき、心身ともに成長することができている。

私が合気道と出会ったのは小学一年生の時であった。もともと姉が道場に通っており、それについていったことがきっかけであった。六年間で基本的な動作を学ぶことができたが、当時はその意味や技についてはいまいち理解できていなかった。一度は合気道から離れたものの、大学に入ってからふと再び始めようと思い立った。大学での合気道は、私の知っていた合気道と全く異なっており、度肝を抜かれた。構えは半身ではなく、足をハの字に正面を向いて構えるし、剣術の考えに則って体術を行うので剣を振る練習があった。なによりも、技を掛けるときに理合を重視しており、どこを狙ってどのように効かすのかをいつも意識して稽古に取り組んでいた。思い返すと、それまで通っていた道場で私は型を意識し、より美しくみせる形を求めていた気がする。その美しさは今でも型を忠実に覚えるうえで重要であると考えてはい

るのだが、大学からはいつでも、どんな相手でも技を効かせられるよう、思考し続けて稽古に取り組んでいる。美しさだけではない、相手を本当に制するための技術、今はこれを追い求めて合気道と向き合っていると感じる。

しかし、一年生のときから真剣に取り組めていたわけではなかった。四股の存在が稽古から足を遠のかせた。腰を落とした姿勢をキープし続けながら四股を踏まなければならず、とにかく太ももが痛くなり、この時間が苦痛であった。しかし、先輩や OB の方々のアドバイスのおかげで、今でも四股は大変ではあるが続けることができている。今年で三年生となり、今の一年生に今まで教えていただいたことや、これまでの気づきを少しでも教えることが目標である。

部紹介

一．正式名称：金沢大学体育会合気道部

二．創部年：一九九七年

三．部役員：（師範）村角美登
（監督）坂井健一
（主将）藤江敦也
（主務）鈴木美和

四．部員数：（総勢）男子：十一名、女子：八名
（一年生）男子：二名、女子：三名
（二年生）男子：四名、女子：四名
（三年生）男子：五名、女子：一名

五．稽古時間：月曜日　十九時から二十一時
水曜日　十九時から二十一時
木曜日　十八時半から二十一時
土曜日　十三時から十六時半

六．道場名（稽古場所）：金沢大学角間キャンパス体育館
第五体育室（柔道場）

七．道場の広さ：約百三十畳

八．年間行事：一月：寒稽古
二月：春合宿
三月：追い出しコンパ
四月：稽古始め
五月：確定新歓
六月：新歓稽古、富山大学合同稽古
七月：北陸地区国立大学体育大会
八月：夏合宿
九月：
十月：東京遠征
十一月：金大祭演武
十二月：富山大学合同稽古

京都産業大学

主将作文

京都産業大学体育会合氣道部　主将　上村光穂

今年度も「連盟誌」の発行、心よりお喜び申し上げます。このたび、京都産業大学体育会合氣道部の上村光穂より寄稿させていただきます。

合氣道部に入部して、早くも二年の月日が経ちました。思い返せば、これまでに何度も「やめようか」と悩んだことがございました。部内で最も体格が小さく、技が思うように決まらず悔しい思いをした日。学業や課外活動との両立が難しく、心身ともに余裕を失った時期。そうした中でも稽古に足を運び続けてこられたのは、「続けること」そのものが、自分を支えてくれていたからだと、今になって強く感じております。

養神館合氣道には勝敗がなく、他者と優劣を競う場面もあまりございません。そのため、努力がすぐに結果として表れることは少なく、やりがいを実感するまでに時間を要する武道であるといえます。しかし、だからこそ、「昨日より少しでも成長したい」「自分自身を乗り越えたい」と願い続ける姿勢そのものが、私にとっては何よりも大きな意味を持つようになりました。

主将として迎えた今年度は、部員数の少なさや、活動の活気をどのように維持していくかに頭を悩ませる日々が続きました。また、これまでに前例があるのかも定かでない女性主将という立場

に、不安を抱えておりました。それでも、稽古の場に立ち続け、後輩に声をかけ、技を磨き、試行錯誤を重ねていく中で、私は一つの確信に至りました。それは、「続けること」そのものが、最も強い意志のあらわれであるということです。部活動を率いる立場として、私は次第に「まず稽古の場に居続けること」の価値を、より深く意識するようになりました。技がうまくいかない日や、気力が湧かない時であっても、道場に足を運び、仲間と共に汗を流すこと、その積み重ねこそが、何よりも確かな土台を築くのだと感じております。

現在も主将としての活動を続けておりますが、日々の稽古の中で、自分の中に一本の軸が確かに育まれてきたように思います。「継続は力なり」という言葉は、決して抽象的な精神論ではなく、この二年間を通じて私自身が体得した、揺るぎない実感そのものです。合氣道を通じて得たこの姿勢こそが、私にとって主将としての最大の学びであり、かけがえのない成果であると、心から感じております。

このような学びの場を与えてくださった先生方、日々の稽古を支えてくださった松尾師範、コーチ、先輩方に、この場を借りて心より御礼申し上げます。今後も、合氣道を通じた学びと交流がより一層深まり、各大学の活動がますます発展していくことをお祈り申し上げます。

部紹介

一．正式名称：京都産業大学体育会合氣道部

二．創部年：一九六五年

三．部役員：(師範) 松尾正純先生
(部長) 菅原宏太先生
(師範代) 宇都宮正敏先生
(指導員) 福原大稀コーチ
(主将) 上村光穂
(主務) 古谷明香里

四．部員数：(総勢) 男子：十六名、女子：五名
(一回生) 男子：六名、女子：〇名
(二回生) 男子：一名、女子：〇名
(三回生) 男子：二名、女子：三名
(四回生) 男子：七名、女子：二名

五．稽古時間：正規練習
月曜日・金曜日　十七時から二十時
水曜日　十三時から十五時
自主稽古
火曜日　十八時半から二十時
木曜日　十三時から十六時半

六．道場名(稽古場所)：京都産業大学総合体育館練習室二

七．道場の広さ：約五十畳

八．年間行事：一月：
二月：師範稽古、幹部交代
三月：春季講習会
四月：新歓祭
五月：鎌倉稽古
六月：六大合練
七月：部内演武大会
八月：師範研鑽会
九月：夏合宿
十月：養神館大会、全日本学生合気道大会、
関西大会
十一月：神山祭
十二月：師範稽古・大掃除

近畿大学

主将作文

近畿大学体育会合気道部　主将　山本圭純

近畿大学体育会合気道部第六十一代主将の山本圭純と申します。近畿大学体育会合気道部では、基本動作と型稽古に加え、短刀を用いた乱取り稽古に取り組んでいます。六月と十月に開催される学生合気道競技大会や昇級昇段審査に向け、部員一同練習に励んでいます。

これまでの部活動の経験を振り返って感じたことは、様々な人とのつながりが、自分自身はもちろんのこと、部活動全体の支えになっていたということです。私は、大学から合気道を始めたため最初は何もわからず、毎回の練習についていくことがとても大変でした。その際に直属の先輩だけでなく、卒業された先輩方やコーチ、外部の先生方など多くの人とのコミュニケーションを意識的にとるようにしました。それを続けた結果、日々の成長と自信につながりました。また、私自身が指導する立場になった際は、これまでの先輩方のように上手く指導することができず、何度も苦戦しました。それでも、周囲の方々に頼ることができる環境があったからこそ、今まで続けることができたのだと感じています。

合気道をする中で困難だったことは多くありました。中でも、入部当初から比較的部員の数が少なく、一時期には新入生

が一名しか入部してもらえないことがありました。練習を行うにあたっても集まれる部員が少なく、その日にできることが限られ、充実した練習とは程遠かったと思います。それでも、やる気や成長意欲を失うことなく続けてきた結果、現在では多くの新入生の入部によって、活気があふれる部活動を行うことができています。加えて先輩、後輩それぞれが互いに刺激を受けることができているため、これまでよりも練習や試合に対するモチベーションが高まっていると実感しています。

振り返る中で、先輩やコーチ、先生方、そして同期によって支えられていると感じています。私が一年生の頃は、私を含めて全員で八名いた同期も現在では三名となりました。上級生が少ないからこそ、部員が学業や就職活動で忙しくなる中でも、それぞれを助け合える関係を築くことができたと思います。

私自身、立派な主将として務めることができているわけではないと思います。それでも、これまで支えてくださった方々に少しでも感謝の気持ちを伝えることや、想いに応えたいと考えています。そして今後、学生時代を振り返った際に、合気道の楽しかった、辛かった思い出をたくさん語ることができるよう、今はとにかく精一杯、合気道を取り組んでいきたいです。

部紹介

一．正式名称：近畿大学体育会合気道部

二．創部年：一九六四年

三．部役員：（師範）成山　哲郎
（部長）道野　真弘
（監督）伊藤　博樹
（主将）山本　圭純
（主務）笹山　睦

四．部員数：（総勢）　男子：　十三名、女子：十名
（一回生）男子：九名、　女子：六名
（二回生）男子：〇名、　女子：一名
（三回生）男子：二名、　女子：二名
（四回生）男子：二名、　女子：一名

五．稽古時間：火曜日　十七時から二十時半
木曜日　十七時から二十時半
金曜日　十七時から二十時半

六．道場名（稽古場所）：近畿大学クラブセンター・三F道場

七．道場の広さ：八十畳

八．年間行事：一月：
二月：　卒業生送別会
三月：　春合宿
四月：　新入生歓迎会
五月：
六月：　関西学生合気道競技大会
七月：
八月：　夏合宿
九月：
十月：　全日本学生合気道競技大会
十一月：関西合気道競技大会
十二月：関西学生合気道新人競技大会

国士舘大学

主将作文

国士舘大学合気道部　主将　岡田太陽

私は大学で武道をやりたいと考え合気道部があったので何となく見学して面白そうだと考えたので入部した。入部した合気道部は昭動館合気道で自分が思っていた合気道よりアグレッシブでかっこよかったからだ。大学一、二年生のころは高校の頃ラグビー部に所属していたこともあり体格と体重が大きかったので力任せに技をかけていたりしていた。しかし、相手のレベルが上がっていくと試合に勝てなくなることが多くあり、負ける試合が多い時期があった。そんな時先生から崩しの重要性を学び、自分のパワーと移動力を生かすにはまず相手を崩しアンバランスな状態にすることが大切だということを学んだ。そのおかげで大学三年の時全日本学生合気道大会の団体戦で優勝することが出来た。

その後、主将に任命されチームを引っ張っていこうと意気込んだ。しかし、チームメイトや監督からのプレッシャーに落ち込むことが多々あった。自分でも不甲斐ない気持ちでいっぱいになった時もあった。だが、それでも立ち止まっている暇はないと思いチームのために必要なことを考え続け練習メニューや目標をつくった。私はこのチームでみながこの部活に入ってよかったと思えるような部にすることを目標に建てた。何故な

ら、合気道は様々な分野で応用の利く武道だと私は考えているので、将来部員たちが様々な仕事ややりたいこと等に部活で学んだ事を生かしてほしいと考えたからだ。又、数多くある部活で合気道部を選択し、自分についてきてくれる部員たち恩返がしたいとも考えたのでただ楽しいだけでなく、試合や昇給昇段審査でもいい成績がとれるようメリハリのあるチームにしたいと考えたので練習メニューはそれを意識して副主将と話しながら考えている。まだまだ完璧にこなせてはいないが仲間達とともに成長し引退まで主将としてチームを引っ張っていきたい。

　私は合気道部に入って本当に良かったと考える。なにより、人に恵まれすぎたと考える。合気道を通して様々な人と出会い、苦楽を共にした仲間たちと練習に励み高みを目指す。こんなに充実した大学生活を経験できた自分は人に恵まれただけでなくほかの大学生よりも幸せ者だと考えた。今後も部活で得た縁を絶やすことなく人生を過ごしたいと考える。

部紹介

一．正式名称：国士舘大学合気道部

二．創部年：一九六三年

三．部役員：（師範）成山哲郎
（部長）河野寛
（監督）大森竜一
（主将）岡田太陽
（主務）川尻七結多

四．部員数：（総勢）男子：十六名、女子：十八名
（一回生）男子：六名、女子：六名
（二回生）男子：二名、女子：七名
（三回生）男子：四名、女子：二名
（四回生）男子：四名、女子：三名

五．稽古時間：水曜日　十八時五分から十九時五分
木曜日　十七時半から十九時
金曜日　十八時五分から十九時五分
土曜日　十一時から十三時

六．道場名（稽古場所）：国士舘大学　世田谷キャンパス
町田キャンパス

七．道場の広さ：畳百五十枚分程

八．年間行事：一月：　寒稽古、新春稽古会
二月：
三月：　春合宿、昇段昇給審査
四月：
五月：東日本学生大会
六月：関西学生大会、新入生歓迎会、
昇段昇級審査
七月：
八月：夏合宿
九月：東日本学生新人大会
十月：全日本学生大会、演武会
十一月：
十二月：納会、関西学生新人大会、
昇段昇級審査

上智大学

主将作文

上智大学体育会合気道部　主将　伊藤　広太郎

上智大学合気道部第六十四代主将の伊藤広太郎です。昨年度二月より主将を務めさせていただいており、日々試行錯誤を重ねながら部の運営に携わっております。自らの未熟さを痛感する場面も多いですが、そのたびに幹部の同期やOB・OGの先輩方、そして後輩たちの支えに助けられ、何とかここまで歩んでくることができました。この場をお借りして、皆様に心より感謝申し上げます。

本年度の合気道部は、新たに五名の新入部員を迎え、総勢十四名で活動しております。現在は三年生を中心とした幹部代で運営を担っており、稽古の構成や行事の計画も学生主体で進めています。日々幹部としての責任を感じながら取り組む中で、多くの学びと成長の機会に恵まれております。一方で、昨年度から続くOB・OGの皆様からの温かなサポート、そして熱心に稽古に励む後輩たちの存在により、部の活動が充実したものとなっていることを実感しています。

六月には昇級審査が実施され、二年生の部員たちがこれまでの努力の成果を存分に発揮する機会となりました。真剣な姿勢からは後輩の頼もしさを強く感じるとともに、自分自身もより一層鍛錬を重ねていかねばならないと、部全体が引き締まるよ

うな思いでした。夏休みには合宿も予定しており、部員一同、技術面のみならず精神面の成長も目指し、一丸となって取り組んでまいります。

上智大学合気道部では、年間を通して多くの行事に参加しています。七月の上南戦を皮切りに、八月の合宿、十月以降に予定されている演武大会、さらには年二回の昇級・昇段審査など、いずれも部員にとって大切な節目となっています。これまでにも新歓活動や上南戦、OB・OG総会といった大きな行事がありましたが、部員一人ひとりの協力のおかげで、いずれも無事に終えることができました。準備や調整は決して容易ではありませんでしたが、今年度はどの行事も部員が主体的に取り組み、楽しめる形にできたと実感しております。だからこそ、そこから得られた経験や学び は非常に大きく、運営に携わる者としてかけがえのない財産となっています。今後も前期の反省と経験を活かし、部員が楽しみながら成長できる活動を目指してまいります。

第六十四代主将として、この歴史ある合気道部、及び合気道そのものの一端を担わせていただけることを、心より光栄に思っております。最後になりますが、これまで温かくご支援くださったすべての皆様に、改めて御礼申し上げます。上智大学合気道部は今後もさらなる成長を目指してまいりますので、引き続き温かく見守っていただけましたら幸いです。

部紹介

一．正式名称：上智大学体育会合気道部

二．創部年：一九六一年

三．部役員：（師範）千田務
（主将）伊藤広太郎
（主務）尾島希一
（渉外）前山覚蔵

四．部員数：（総勢）　男子：九名、女子：五名
（一年生）男子：二名、女子：三名
（二年生）男子：一名、女子：二名
（三年生）男子：五名、女子：〇名
（四年生）男子：一名、女子：〇名

五．稽古時間：月曜日　十八時から二十時
水曜日　八時から二十時
金曜日　十八時から二十時
土曜日　十四時から十七時

六．道場名（稽古場所）：上智大学地下柔道場

七．道場の広さ：約百四十畳　（四谷キャンパス）

八．年間行事：一月：　オフシーズン
二月：　春合宿
三月：
四月：　新入生歓迎会
五月：　OB/OG 総会
六月：　前期審査、納会
七月：　上南戦、オフシーズン
八月：　夏合宿
九月：
十月：　演武大会等
十一月：演武大会等
十二月：後期審査、納会

成城大学

主将作文

成城大学合気道部　主将　宮下遥貴

成城大学合気道部で過ごす時間も残すところ三カ月となりました。ついこの前主将作文を作成したつもりでいたため、時間の流れがとても速く感じます。この一年間は主将として部活の運営もしつつ、就職活動と学業についても力を入れなければならず、苦しくも非常に充実感のあるものでした。その中で、どうしても就職活動に集中しなければならず、部活に出られない期間ができてしまったのですが、後輩が代わりに部活を引っ張ってくれて、本当に頼もしく感慨深かったです。この件だけでなく、様々な場面で部員の強い支えがあり、おかげでここまで部活を続けることができました。本当にありがとうございます。

私は昨年の主将作文で今後の部活の運営目標について触れていたと思います。部活の運営に関しては正直どうしても行き詰ってしまう点があり、このやり方しかなかったのかと後悔することもありましたが、練習内容の運用など部活としての基礎的な土台を作ることはできたのではないかと考えております。しかし現状に満足することなく残り短い期間ではありますが、さらに良い結果が得られるように試行錯誤して運営の方行ってまいります。

先述いたしました、これまでの活動の甲斐もあり、成城大学合気道部は今年新入部員を七名迎え入れることができました。過去二年間でここまで大人数で新入生が入部してくれたことがなかったためとてもうれしく思います。私はあと三か月程で引退してしまうため今後成城大学合気道部がどのような部活になっていくか楽しみでもあり、そこに自分はいないと思うと悲しくもなり、複雑な気持ちになります。短い時間ではありますが、自分が後輩にできることを考えサポートし、今後も合気道部で仲良く活動していってほしいと切に願います。

私はここからの三カ月は最後の全国大会に向けて稽古を重ねていくこととなります。恥ずかしながらここ一年間は大会で目立った結果を残せていないため、三年間先輩や監督から教わった内容や、基礎的な内容や応用的な内容についてもう一度見直して準備し、引退の時に後悔が残らないように全力で頑張ろうと思います。終始まとまらない文章ではございますが主将作文とさせていただきます。

部紹介

一．正式名称：成城大学合気道部

二．創部年：一九六三年

三．部役員：（師範）酒井進之介
（監督）小松正治
（主将）宮下遥貴
（主務）山崎愛生、星野文俊、上坪さくら

四．部員数：（総勢）　男子：八名、女子：九名
（一回生）男子：五名、女子：二名
（二回生）男子：〇名、女子：三名
（三回生）男子：一名、女子：二名
（四回生）男子：二名、女子：二名

五．稽古時間：火曜日　十六時半から十九時半
水曜日　十六時半から十九時半
木曜日　十六時半から十九時半
土曜日　十六時から十三時
日曜日　十時から十三時

六．道場名（稽古場所）：大道場

七．道場の広さ：百二十六畳

八．年間行事：一月：
二月：　春合宿・学生合気道連盟合同研修会
三月：　四年生追い出し稽古
四月：　新入部員歓迎会
五月：
六月：　東日本学生大会・関西学生大会
七月：
八月：　夏合宿
九月：　東日本学生新人大会
十月：　全日本学生合気道競技大会
十一月：
十二月：関西社会人大会・関西学生新人大会

専修大学

主将作文

専修大学体育会合気道部　主将　黒沢勇斗

専修大学合気道部六十五期主将の黒沢勇斗です。この作文では、合気道部での活動を通して私が学んだことについて書かせていただきます。

私が合気道を通じて得た最大の学びは、「何かを上達させるには、粘り強く努力し続けることが大切だ」ということです。言葉にすれば簡単ですが、実際にそれを継続するのは容易ではありません。

私自身、地道な努力はあまり得意ではなく、きついことからはつい逃げてしまうタイプでした。何かを頑張るときも、途中で「まあ、このくらいでいいか」と妥協してしまうことが多く、これまでの人生で何かに本気で打ち込んだ経験はほとんどありませんでした。

大学で合気道部に入部したのは、運動不足を解消したいという軽い気持ちからでした。週に二～三回、定期的に体を動かせれば十分だと考えていました。

しかし、入部してすぐにその考えは甘かったと痛感しました。稽古は想像以上に厳しく、武道経験のない私にとっては動きに慣れるのも一苦労で、技もうまく決まりません。思うよう

に上達できず、苛立ちや不安を感じる日々が続きました。「自分には向いていないのではないか」と悩むこともありました。
そんなある日、先輩や同期の稽古姿を見て、私は大きな気づきを得ました。彼らは、ただひたすらに稽古を繰り返していたのです。
週六日稽古に励み、技の理合を研究する先輩。どんな稽古でも全力で取り組み、妥協を許さない姿勢を貫く先輩。たとえ疲れていても諦めず、言い訳せずに努力を続ける同期。彼らの姿を見て、「技術は一朝一夕では身につかない。継続こそが力になる」と実感しました。
それから私は、彼らの姿勢を真似るようになりました。稽古量を増やし、週六日すべての稽古に参加。稽古中も一つひとつの技に全力で向き合い、妥協を許さない姿勢を意識しました。
特に、厳しい先輩に積極的につき、あえて稽古の負荷を高めるようにしました。技の精度が高い先輩には自分から声をかけてつかせてもらうことを徹底し、稽古への甘えをなくしました。「何が何でも稽古に出る」という覚悟を持ち、自分の気分や体調に左右されずに稽古に向かうようになりました。
気づけば、技の意味や理合も少しずつ理解できるようになり、稽古が楽しくなっていました。技が決まるたびに「もっと上手くなりたい」という気持ちが強くなり、自然と集中力も高まりました。
そして、先輩たちが引退し、自分が部の主将に任命されました。あの時、諦めずに稽古を続けたからこそ、今の自分があります。合気道部に入り、先輩や同期と出会い、本気で合気道に向き合えたことは、私にとって大きな財産です。
もともと妥協しがちで、何かに本気で取り組んだ経験が少なかった私ですが、彼らの姿に刺激を受け、「粘り強く努力することの大切さ」に気づき、その姿勢を、部活動を通して実際に体現することができました。
この学びは、武道だけでなく、人生のあらゆる場面に通じる教訓だと感じています。今後もこの姿勢を忘れず、どんな困難にも粘り強く向き合っていきたいと思います。

部紹介

一、部の正式名称：専修大学体育会合気道部
二、創部年：一九五七年
三、部役員：（師範）　堀越祐嗣
（部長）　石崎徹
（監督）　小谷田洋一
（主将）　黒沢勇斗
（副将・統制）横道穂里
（主務・会計）葛西萌恵
（渉外）　平田実紗希
（広報）　木田恭誠
（幹事長）　近藤怜
（新歓・鳳祭）大橋紘子
（指導補佐）　井坂匠汰
（主務補佐）　葭葉一輝
四、部員数：（総勢）　男子：十四名、女子：十二名
（一年生）七名
（二年生）九名
（三年生）七名
（四年生）三名
五、稽古時間：月曜日　十三時から十四時半
十八時十五分から十九時四十五分
火曜日　十五時半から十七時半
十八時半から二十時
水曜日　十四時五十分から十六時二十分
木曜日　十五時半から十七時
金曜日　十三時から十五時
十八時から十九時半
土曜日　十四時半から十六時半
六、道場名（稽古場所）：生田キャンパス　総合体育館柔道場
千代田区スポーツセンター　柔道場
明治神宮　武道場至誠館
神田キャンパス第三体育室
七、道場の広さ：約二〇四畳（生田キャンパス）
約一九八畳（千代田スポーツセンター）
約一五六畳（明治神宮武道場至誠館）
八、年間行事：一月：寒稽古
二月：強化練習、春合宿
三月：連盟合宿
四月：新歓活動
五月：新入生歓迎会、新歓合宿
六月：
七月：
八月：強化練習
九月：夏合宿

十月：　連盟演武大会
十一月：鳳祭（文化祭）
　　　　昇段・昇級審査
十二月：稽古締め

中央大学

主将作文

中央大学学友会体育連盟合気道部　主将　橋本和弥

今回僭越ながら、私が四年間の稽古を通して得た気づきについて述べたいと思う。

高校時代、私はサッカー部に所属していた。私のいた部はそれなりの強豪校で、三学年合わせて七十人近くの部員が所属していた。チームには私より優れた選手が多数おり、なかなかトップチームの試合に絡むことはできなかった。

大学進学後は、新しいことに挑戦したいと考え、友人が体験に行っていた合気道部に偶然ついて行き、そのまま入部した。それまで試合のないスポーツや武道の経験がなかったため、入部当初は、型稽古なんて何の役にも立たないだろうと考えていた。しかし稽古を続けていくうちに、あることに気がついた。それは、自分自身に目を向けることの大切さ、だ。

一般的に合気道では型稽古を行う。大会がなく順位もでないし、スタメン争いもないなど、他人と自分を比べるという要素が少なく、この点で他のスポーツや武道と大きく異なる。そして他人と比較することがないので、自然と「どうすればより相手に効く技をかけることができるのか」や、「自分の苦手な技・動きは何か」というように自分自身に焦点を当てるようになる。その結果、自

分のそのときの課題が明確になり、それを解決することで成長しやすくなる。

さらに私の高校時代を具体例に挙げると、サッカー部では日々のトレーニングからA、B、Cチームに分かれて行っていた。そのため「自分はこのポジションでは今チームで〇番目だ」といった序列を常に意識せざるを得ない。そうなるとどうしても、「なんで自分ではなくてあいつが試合に出るのだ」とか、「俺の方がうまいのになんであいつが上なのだ」というように他人にばかり意識が向いてしまっていた。

一方合気道では、人と技をかけ合うなかで、他人と自分を比べることがなく、「自分はこの人より四方投げがうまいな」などと変に優越感を抱くこともない。その結果、自然と自分自身に意識を向けることができ、自己の課題を発見しやすくなる。自分の現状に目をむけることが大切だと気がついてからは、実際に、合気道の技術面でも大きく成長を感じるようになった。

またこの気づきは、合気道以外の面でも自分の成長に役立っていると感じる。

現在、私は現在資格取得に向けて勉強しているが、同年代で先に試験に合格した友人たちと自分を比べなくなった結果、自身を振り返り今の自分に必要なことを明確化でき、その結果成績も伸び始めた。そのように多くの場面で、この気づきは自分の成長に役立っていると感じる。

このように私は合気道を通して、他人と比較せず自分自身に目を向けることの大切さ、に気づくことができたと感じている。

部紹介

一．正式名称：中央大学学友会体育連盟合気道部
二．創部年：一九五八年
三．部役員：（師範）宇田川哲哉
（部長）堀内恵
（監督）山ノ井和哉
（主将）橋本和弥
（主務）山本佳奈
（副将）宮内克斗、近藤樹香
（統制）大門天心、石賀なつ葵
（会計）岡田花奈
（体連）森諒哉
（渉外）岡陽太
（幹事）佐々木ひかる
四．部員数：（総勢）　男子：二十二名、女子：三十一名
（一年生）男子：九名、女子：十二名
（二年生）男子：五名、女子：十三名
（三年生）男子：二名、女子：一名
（四年生）男子：五名、女子：五名
五．稽古時間：月曜日　十七時半から十九時半
火曜日　十三時から十五時
（隔週）八時五十分から十時二十分
水曜日　十三時から十五時
（隔週）八時五十分から十時二十分
木曜日　八時五十分から十時二十分
（隔週）十三時から十五時
金曜日　十八時から二十時
土曜日　十七時から十九時
六．道場名（稽古場所）：多摩キャンパス第一体育館二階合気道場
七．道場の広さ：百十畳
八．年間行事：一月
二月：　春季合宿
三月：　連盟合宿、二十大学合同稽古
四月：　新入生歓迎演武
五月：　新入生歓迎合宿
六月：　OB 総会
七月：　前期昇級/昇段審査、前期納会
八月：
九月：　夏季合宿
十月：　全日本学生合気道部連盟大会
五大学合同稽古
十一月：白門祭演武
十二月：後期昇段審査、OB 合同稽古、
後期納会

東京大学

主将作文

東京大学運動会合気道部　主将　今城宏都

二〇二四年三月、我々東京大学合気道部は創部七十周年を記念して全国歴訪を行った。北海道から始まり沖縄まで、日本全国を縦断しながら各地で卒部された先輩方や他大学の合気道部と稽古を行い、交流を深めた。この歴訪の目的は、歴訪の目的がコロナで希薄になってしまったOBOGの先輩方との交流と、今までほとんど関わりのなかった他大学の合気道部を訪問することであった。東京大学合気道部は全日本合気道連盟に所属しており、武道館での演武会や連盟加盟校による合宿で他校との交流を行っているが、合気会の所属校との関わりは少ない。この機に全国的に交流の輪を広げることが今後の部活動にも良い影響だろうということもあった。

全国各地を回る中で、田中茂穂先生のご指導から端を発した合気道部の稽古とは異なる技や考え方を多く学ぶことができた。当然連盟加盟校にもそういった大学は存在するが、合気会の本部道場でも稽古を行うような東北大学など、合気会の教えを色濃く受けている技は非常に興味深かった。一方で、田中先生の指導から続く中央大学や専修大学の合気道部の技が、どういった点で我々東京大学の目指すところに近しいのかを再確認する機会でもあった。

年に何度も合同稽古を行うとまではいかずとも、稽古を他大学と行う機会があるというのは、非常に価値があるものだと考える。試合のある流派は存在しているものの、多くが型稽古を基本とする合気道において、部活という限られた範囲のみで稽古を行っているとどうしても視野が狭くなってしまう。当然ながら目指すところはあるものの、同じ指導を受けている学生だけではやはりどこかマンネリ化してしまうことは否めない。他大学の考え方や雰囲気を合同稽古という場を通じて学ぶことは、こういった単一化を防いでくれるように思う。実際、記念歴訪で稽古をした各大学はそれぞれに特色があり、基礎となる理論や技を聞くことができて非常に興味深かった。部員としても刺激を受けていたようで、歴訪後に意欲的に稽古に参加する人が多かった。

このような全国的な交流はやはり継続が難しいのが現実である。弊部から先方に連絡を取って実現できた合気道歴訪であったが、短い大学生活の中での活動では、どうしても毎年行うというわけにはいかない。これを鑑みると、毎年実施している連盟合宿、合同稽古がいかに貴重か実感できる。自分に向き合うことの多い合気道の稽古の中で、連盟というつながりを持つ他大学との交流が続いていくことを期待する。

部紹介

一. 正式名称：東京大学運動会合気道部

二. 創部年：一九五四年

三. 部役員：
（永世師範）故田中茂穂
（名誉師範）稲葉稔
（名誉師範）山田高廣
（師範）　堀下直人
（コーチ）　朽名英明
（部長）　能智正博
（主将）　今城宏都
（主務）　渡邉紗英子

四. 部員数：
（総勢）　男子：三十二名、女子：十一名
（一年生）男子：十五名、女子：三名
（二年生）男子：六名、女子：四名
（三年生）男子：八名、女子：二名
（四年生）男子：三名、女子：二名

五. 稽古時間：月曜日から金曜日　十二時十分から十二時
五十分（駒場、本郷）
火曜日・木曜日　十八時五十分から二十時
五十分（本郷）
水曜日・金曜日　十八時五十分から二十時
五十分（駒場）
土曜日十時から十二時（至誠館）

六. 道場名（稽古場所）：駒場キャンパス第一体育館武道場
本郷キャンパス七徳堂

七. 道場の広さ：約百八十二畳（駒場キャンパス）
約百八十二畳（本郷キャンパス）

八. 年間行事：一月：　寒稽古
二月：　二月強化練習、検見川合宿
三月：　連盟合宿
四月：　新歓演武会
五月：　五月祭演武会
六月：　六月強化練習
七月：
八月：　夏合宿
九月：　九月強化練習
十月：　連盟演武大会
十一月：駒場祭演武会
十二月：十二月強化練習

東京医科大学

主将作文

東京医科大学合気道部　主将　秋元遼

東京医科大学合気道部は現在、医学科十五名が部員として所属しています。年々の医学の進歩により医学科カリキュラムが増えたことで試験や実習が多忙になったため、練習時間や練習量の確保は難しくなりつつあります。しかし先生方がご指導に来てくださることにより部員たちは集中力を欠くことなく練習に取り組むことができています。それに加えて今年度より新しく武田欣士先生をコーチとしてお迎えすることとなり、昨年度以上に部員一同の合気道に対する理解が広がり更なる成長に繋がりました。定期的に指導者を派遣していただくようお取り計らいくださいました、全日本学生合気道連盟の方々、東京医科大学合気道部部長の塚原清彰先生にこの場をお借りしまして深く感謝申し上げます。

令和二年より新型コロナウイルス(COVID-19)が流行し多くの人が生活の制限を強いられ、長い間不安に晒されることになりました。しかし世界中の医療従事者の方が人々の命や生活そして文化を守るために尽力してくださいました。そのおかげで令和七年七月現在、コロナ禍前の生活をほとんど取り戻すことができ、大会や審査会、他大学との合同稽古会など様々な行事が催されました。特に昨年の十月に行われた第六十三回全日本学生合気道演

武大会や日本合気道協会設立五十周年記念大会では、富木流だけでなく様々な流派の合気道を目の当たりにし交流することができ合気道の知見が更に広がるとても良い機会となりました。

また今年度の六月に行われた春の学生合気道競技大会では徒手乱取が復活し、それを目の当たりにして現代の富木流が変化しつつあるものなのだと実感いたしました。

東京医科大学合気道部の活動として大会での乱取試合への出場や審査会での二段合格など、新型コロナウイルスの流行によって休止していたものが復活することとなりました。しかし新型コロナウイルス流行前の活動のうち行うことが出来ていないものも多々あり、それらを再び行うことができるように邁進していきます。

新型コロナウイルスを乗り越え現在まで東京医科大学合気道部が精力的な活動を継続することができているのは、全日本学生合気道連盟関係者やOB、OGの方々の長きに渡るご支援の賜物であり、心より感謝を申し上げます。

合気道が今後他大学、他流派との更なる交流の輪が広がり、繁栄していくことを心からお祈りし、我々東京医科大学合気道部はその一助となれるよう尽力して参りますので今後とも宜しくお願い申し上げます。

部紹介

一．正式名称：東京医科大学合気道部

二．創部年：一九七二年

三．部役員：（部長）塚原清彰
（監督）鎌田浩亮
（主将）秋元遼
（主務）村田泰葉

四．部員数：（総勢）　男子：六名、女子：九名
（一年生）男子：一名、女子：〇名
（二年生）男子：二名、女子：三名
（三年生）男子：〇名、女子：〇名
（四年生）男子：一名、女子：三名
（五年生）男子：〇名、女子：三名
（六年生）男子：二名、女子：〇名

五．稽古時間：火曜日　十八時から二十時
木曜日　十八時から二十時
土曜日　十時から十二時

六．道場名（稽古場所）：東京医科大学記念会館地下道場

七．道場の広さ：五十畳

八．年間行事：一月：
二月：
三月：卒業式
四月：新入生勧誘
六月：新入生歓迎会
七月：幹部交代式
八月：
九月：
十月：
十一月：
十二月：納会

富山大学

主将作文　『つながりの中で生きる』

富山大学体育会合気道部　主将　清水昭伸

連盟誌に寄稿する機会をいただき、ありがとうございます。合気道の稽古を通じて感じたことを拙いながらまとめてみました。

私は合気道を通して、人や目に見えないものとのつながりの中で生きていることを強く感じています。稽古では相手に技をかけるときにはその動きの変化から、しっかりと崩れているかどうかを判断します。受けるときは、自分の重心がどこに移動し、どう崩れたのかを意識して受けています。決まった型の動きと、重心や力の流れといった目に見えない要素を観察し、相手の存在や見えない力の変化を照らし合わせながら理解することを繰り返しています。文章にすることは容易ですが、実践することは難しいです。相手の攻撃を捌こうとする際、頭はその瞬間にとらわれ、掴まれた場所や受け止めた場所で対処しようとしてしまい、必要以上の力を使うことになって体捌きも乱れてしまいます。瞬間ではなく全体を見ることを心がけ、冷静に稽古へ臨みたいと考えています。

今年度は、周年記念大会に向けて、歴代の先輩方が行った剣帯術に挑戦しています。一見すると、刀を腰に差しているだけのように見えるかもしれませんが、それだけで動きは格段に難しくな

ります。大会が近づく中で思うように上達せず、焦りや不安を感じながらリハーサルに臨みました。そのとき、師範や先輩方からいただいた「刀を持っていても、体術と同じようにすればいい」、「緊張や不安といった感情は、そのまま技に表れる」という言葉にはっとさせられました。私は、型をこなすことや自分の焦りばかりに気を取られ、相手を意識できていなかったのです。この気づきを大切にし、今後は心のあり方や相手との関わりにも目を向けながら、取り組みたいと思います。

　貴重な時間を割いてご指導くださる師範や監督、コーチの先生方、先輩方のご厚意に深く感謝しております。多くの方々の支えがあるからこそ、日々の稽古や活動に取り組むことができていると実感しています。このつながりを大切にし、感謝の気持ちを胸にこれからも稽古に励んでまいります。

　最後になりますが、合気道を通じて得られる「つながり」の大切さをかみしめ、今後とも精進してまいります。変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

部紹介

一．正式名称：富山大学体育会合気道部

二．創部年：一九七〇年

三．部役員：（師範）　長井忍
（部長）　宮一志
（監督）　名古屋孝之
（主将・連絡）清水昭伸
（副将・主務）平岡佑己
（会計）　童以清
（広報）　本名ほのか

四．部員数：（総勢）　男子：八名、女子：六名
（一年生）男子：一名、女子：三名
（二年生）男子：四名、女子：一名
（三年生）男子：二名、女子：二名
（四年生）男子：一名、女子：〇名

五．稽古時間：火曜日　十八時半から二十時半
金曜日　十八時半から二十時半
土曜日　十四時半から十六時半

六．道場名（稽古場所）：富山大学構内武道場

七．道場の広さ：約百三十畳

八．年間行事：一月：
二月：　春合宿
三月：　強化練習会、連盟合宿
四月：　新入生歓迎イベント
五月：　新入生歓迎バーベキュー
新入生歓迎コンパ
六月：　金沢大学合同稽古
七月：　北國スポーツ大会演武大会
八月：　夏合宿、昇級昇段審査
九月：
十月：
十一月：富山大学体育会合気道部創部
五十・五十五周年記念大会
十二月：金沢大学合同稽古、納会

明治大学

主将作文

明治大学体育同好会連合会合気道部　主将　宮尾玲宏

合気道部において二年間主将を務めた経験は、単なる立場を超えた人間的成長の機会であった。主将としての責務は技術指導のみならず、部員一人ひとりの性格や志向に配慮しながら、部全体の調和を保つことであり、その難しさと意義の大きさを痛感した。特に入部して日が経たない新入生に対しては、稽古への動機づけや個々の成長の支援が求められ、言葉一つにも細心の注意を払う必要があった。部員の手本となる上でこうした困難を一つ一つ解消していく日々であり、そうした意味でも、合気道部の主将である以前に人として手本になることを目標にした二年間であった。

合気道は技の習得に時間がかかる競技であるため、即時の成果が見えにくい。そんな中でも、腐ることなく粘り強く取り組む姿勢を部内に浸透させることが部としての課題であった。その課題に対応すべく、稽古後の振り返りや部員の努力を積極的に称える声かけを意識的に行うことで、前向きな雰囲気の醸成に努めた。一人一人に目を向け、それぞれに適切な声かけを行う。細部の変化や成長、努力に目をこらし、称賛する。これは二年間主将として部を俯瞰的に見ていたからこそ見出した境地である。

この主将経験を通じて得られた最大の学びは、「人を動かすには、まず自らが誠実であることが必要である」という点である。自身の姿勢が模範となることで、部員の間に自然と信頼が生まれ、最終的には部全体が一枚岩のような結束力を持つに至った。リーダーシップとは、単なる統率力だけでなく、人格そのものが問われるものであることを強く認識した。この経験は、自身の今後の人生においても必ず活かされる貴重な財産であると確信している。

部紹介

一．正式名称：明治大学体育同好会連合会合気道部

二．創部年：一九六九年

三．部役員：（師範）栗山直規

奥山英男

（部長）柴田有祐

（監督）西森雄大

（主将）宮尾玲宏

（副将）眞榮城玄規

（会計）今井裕之

（内務）大橋拓海

（外務）佐野鷹融

四．部員数：（総勢）男子：十三名、女子：五名

（一年生）男子：四名、女子：三名

（二年生）男子：二名、女子：二名

（三年生）男子：四名、女子：〇名

（四年生）男子：三名、女子：〇名

五．稽古時間：土曜日　十二時半から十四時半

日曜日　十三時から十七時

六．道場名（稽古場所）：明治大学和泉キャンパス総合体育館

柔道場

七．道場の広さ：約二百五十畳

八．年間行事：一月：　新年稽古会

二月：

三月：　春合宿

四月：　新歓

五月：　新人大会

六月：　春季関東学生合気道競技大会

七月：　昇級・昇段審査

八月：

九月：　夏合宿

十月：　全日本学生合気道競技大会

十一月：秋季関東学生合気道競技大会

十二月：

早稲田大学

主将作文

早稲田大学合気道部　主将　坂井拓海

大学最後の年を迎え、合気道に没頭できる期間も残りわずかとなりました。そこで、この度の主将作文ではこれまでの稽古を振り返り、自分の続けてきた稽古の意味を問い直したいと思います。

一年生時代の稽古はほとんどが受け身の練習でした。多くのことを学んだ今でこそ受け身の大切さは実感を持って理解することが出来ますが、技を十本かそこら学んだ程度の初心者にとって受け身は辛いトレーニングでしかなく、稽古についていくのがやっとでした。本当に自分は合気道をしているのだろうかと思っていたそんな中、先輩方の演武、乱取りを見る機会を得て感動したのを覚えています。披露された先輩方の技は何ともキレのあるもので、合気道を始める前は漠然と魔法みたいだなと感じていたものが現実に存在するのだと初めて理解できました。

それから二年が経った現在、憧れた合気道は決してよくわからない魔法などではなく、磨き上げられた技なのだと感じるようになりました。自分の教わった形について一日で完璧にこなせるようなものはなく、また永遠に完成させることが出来るのかさえ分かりません。それでも、今日こそは今日こそはと稽古

を積み重ねていく中で、実は自分の理解に見落としがあった、もしくは他の技で教わったことが活かせるものだったと気づくことがあります。いわば稽古で学んだ様々なことの点と点が線でつながるような瞬間が生まれる、それにより自分の理解が深まり技を磨くことができるのです。この点と点が線でつながる瞬間を追い求めることこそ稽古を続ける意味なのでしょう。きっと一年生時代に憧れた先輩方の合気道は、そんな日々の稽古の積み重ねが作り上げたものだったのだと思います。

　コロナ禍も過ぎ去り各団体の活動も活発となったことで、連盟合宿や演武大会では各大学のより磨き上げられた技を見ることが出来るようになったと感じております。そのような貴重な機会の準備にご尽力してくださった連盟委員の皆様には、この場をお借りして感謝申し上げます。流派を超えた連盟の活動に少しでもお力添えできるよう私たちも尽力して参りますので今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

部紹介

一．正式名称：早稲田大学合気道部
二．創部年：一九五八年
三．部役員：（師範）　志々田文明
（師範）　佐藤忠之
（師範代）谷繁強志
（部長）　加藤尚志
（監督）　白岡岳人
（主将）　坂井拓海
（主務）　山口翔平
四．部員数：（総勢）　男子：十三名、女子：十二名
（一年生）男子：六名、女子：三名
（二年生）男子：二名、女子：四名
（三年生）男子：三名、女子：五名
（四年生）男子：二名、女子：〇名
五．稽古時間：月曜日　十七時から十九時
火曜日　十七時から十九時半
水曜日　十七時から十九時半
木曜日　十六時半から十九時
金曜日　十七時から十九時半
土曜日　十五時から十八時
六．道場名（稽古場所）：早稲田キャンパス十七号館合気道場
七．道場の広さ：百六十八畳
八．年間行事：一月：　寒稽古
二月：
三月：　連盟合宿・春合宿
四月：　新歓
五月：　関東学生合気道競技新人大会
六月：　関東学生合気道競技大会
七月：　前期納会、昇級昇段審査会
八月：　国際大会
九月：　夏合宿、全日本学生合気道競技大会
十月：　早慶合氣道定期競技会
十一月：関東学生合気道競技秋季大会
十二月：後期納会、昇級昇段審査会

四、特別企画―一問一答―

1．合気道を始めたきっかけを教えてください。

山形市内の県立山形中央高等学校へ進んだ私は柔道部に籍を置き、昭和三十九年秋に行われたオリンピック東京大会の柔道競技をテレビで見ながらオリンピック選手に憧れていました。ある夏の合宿練習に国士舘大学の柔道部員が指導に来てくれました。高校生の我々がどのように頑張っても全く歯が立たず、その強さに驚いたものです。しかしその指導ぶりは懇切丁寧でとても優しく、頼りになる兄貴と言った感じでした。こうして四十一年春、国士舘大学法学部に入学しました。当初は柔道部に入るという目的を持っていたのですが、入学と同時に入った学生寮の先輩の勧めで合気道部に入部することになりました。

成山哲郎　先生

大学生の時に成山哲郎師範の技を見て感動し、何の迷いもなく始めました。

大森竜一　先生

恩師の富木謙治先生に勧められて

佐藤忠之　先生

私が合気道を始めたのは、母校である成城大学の合気道部入部がきっかけです。「合気道部」は当時の情熱を注ぐに足る、十分やりがいのある場でした。その後、社会人合気道を経て、現在のように合気道専従者となりました。今から思えば、学生合気道は生涯体育の一時期に過ぎないかも知れませんが、それでもなお、あの頃のひた向きに取り組んだ時期があるから今があるとおもえます。

酒井進之介　先生

中学、高校時代は柔道部で稽古をしていたが、中央大学に入学したときに、他の武道をやってみようと思い立ち、合気道部に入部したことがきっかけです。

宇田川哲哉　先生

中学生の時に柔道をやっていましたが、柔道をやるきっかけが合気道でした。近所に合気道場があってカッコよく相手を投げ飛ばす合気道に興味があったものの合気道部がなかったので柔道部に入りました。大学に入ると体育実技で合気道があったので履修しました。柔道の延長線上に合気道を捉えてやっていましたが、志々田先生のお声かけもあって合気道部に入り本格的に合気道を始めました。

谷繁強志　先生

先輩に勧誘されて

宇都宮正敏　先生

姉が合気道の道場に通っており、一緒にやりたいと思ったのがきっかけで小学一年生のころにやり始めた。一度やめたが、大学に合気道部があると知り、もう一度やってみようと思い入部した。

金沢大学・藤江敦也（主将）

大学一年生のとき、特定の部活に所属しておらず、一年が過ぎようとしていました。二年生となり、新しいことに挑戦したいと考えていたところ、友人から合氣道に誘われたため、体験稽古に参加した際、その奥深さと礼儀を重んじる雰囲気に惹かれ、入部を決めました。

京都産業大学・福井佑京（副将）

大学生になるにあたって何か新しいことに挑戦したいと思い、様々な部活動紹介を見る中で合気道を見つけました。そして、私と同じように大学から始めた先輩方がほとんどであることを知り、合気道部の体験に参加しました。体験時、知識や経験がなかったものの、先輩方がとても楽しそうに取り組まれている様子を見て、合気道を始めようと思いました。

近畿大学・山本圭純（主将）

私は警察官を目指しているので大学の部活で今は武道をやりたいと考えていた。しかし、メジャーな武道より今までやったことのない武道をやってみたいと思い始めた。

国士舘大学・岡田太陽（主将）

新歓にて合気道部の体験会に参加した際、OB の先輩方に理解できない理屈で技をかけられたこと。また加えて当時の主将の人間性に惹かれたため、合気道部に入部することにした。きっかけは特に印象的なものではなかったが、活動を続けていくことで合気道を続ける理由を多く見つけることとなった。

上智大学・伊藤広太郎（主将）

中学二年生頃まで習っていた合気道を思い出し、大学で再開したいと思ったから。

成城大学・星野文哉（主務）

合気道を始めたのは、大学で何か新しいことを始めたいと思ったからです。入学してから七月までサークルや部活に入っておらず、家と大学の往復だけの毎日で暇を持て余していました。そんな時、体験会を続けていた合気道部を見つけて参加し、そのまま入部しました。

専修大学・黒沢勇斗（主将）

小学校の頃、近所の合気道道場に短い期間だったが通っていた。大学生活で一つのことを続けようと考えていたため、楽しかった記憶もあり合気道部を選んだ。

東京大学・今城宏都（主将）

高校生のとき、合気道は最小限の力で相手を制する武道だと知り、興味を持ちました。大学の部活見学で師範の技を受ける機会があり、力で押される感覚が無いのに体軸が崩れていた衝撃をいまでも鮮明に覚えています。相手に無理な負担をかけずに崩すその技に憧れ、稽古を通して身につけたいと感じ、合気道を始める決心をしました。

富山大学・清水昭伸（主将）

合気道は力ではなく理合を活用した武道であるという印象がありました。そのため、護身術として合気道を学んでみたかったのがきっかけの一つです。また、実際に合気道を目の当たりにして先輩方の袴姿に憧れ、合気道の道に進みました。

東京医科大学・村田泰葉（副将）

友人の合気道部への体験について行ったところ、先輩方が丁寧に教えてくださり、ここなら四年間頑張れそうだなと感じたから。また、先輩の「合気道を学んだことで多少のことでは動じない自身や胆力がついた」という言葉が印象的だったから。なおその友人は一年も経たずにやめてしまった。悲しい。

中央大学・橋本和弥（主将）

運動が苦手で、それを克服しようと運動部へ入部しようと思ったが、ハードな運動は嫌で、和気あいあいとした雰囲気を醸し出していた合気道にしようと思ったため。しかし、初日から受け身がきつかった。何なら大会前に入部したため雰囲気も殺伐としていた。悲しいことに他に行く当てもないのでこの部に学生生活、骨をうずめることになった。

明治大学・佐野鷹融（外務）

元々、己の心身を鍛えることが出来る武道に興味があり、一年生の時に参加した体験会で先輩方の技に魅了され合気道を始めました。

早稲田大学・坂井拓海（主将）

2. 座右の銘を教えてください。

「継続は力なり」

成山哲郎 先生

「過去の実績に縋ることは、成長が止まった証である。」
過去の成果(結果)を懐かしむのは悪いことではないが、それに縋るのは現在の自分よりも過去の自分の方が素晴らしかったと言っているのとほかならず、自らの成長を否定したことになる。常に成長し続けたいものである。

大森竜一 先生

提一燈 行暗夜 勿憂暗夜 只頼一燈

佐藤一斎言志録より

佐藤忠之 先生

ある時期までは「清濁併せ呑む」を座右の銘としてきました。まっしぐらに突き進む時期は今思い返しても必要とおもいます。そうでなければなかなか本物は身につかない。そして少しずつ、これまで行ってきたことを整理しながら、進むようにしたいと考えています。

酒井進之介 先生

自ら反みて縮くんば、千万人と雖も、吾往かん

孟子

宇田川哲哉　先生

「八風吹けども動ぜず」

風は、下記の通り八つあり、心が動揺する要因です。これらの状況にあっても動じない心を持とうというものですが、面白いのが辛いことのようなネガティブなものだけでなく、得をしたり、褒められたりと言ったポジティブなことがある時も、人は平常心を失うので、戒めているところです。悪い時には落ち込み過ぎず、良い時には浮かれ過ぎないようにしたいと思っています。

利(り)：利益や得ること

衰(すい)：損失や失うこと

誉(よ)：賞賛されること

毀(き)：非難・誹謗されること

称(しょう)：良い評判

譏(き)：悪い評判

苦(く)：苦しみ

楽(らく)：楽しみ

谷繁強志　先生

士別れて三日なれば、即ち更に刮目して相待すべし（呂蒙）

宇都宮正敏　先生

「謹厳実直」

意味は、慎み深く、まじめで正直なこと。誠実に、実直に稽古に励んでいき、日々の積み重ねを大事にして生きようと思いこの言葉を座右の銘にした。

金沢大学・藤江敦也（主将）

「ゆったりまったりマイペースに」

京都産業大学・福井佑京（副将）

「前後際断」

もうすでに起こってしまったことや、これから起こることを考えすぎて今を無駄にしてしまわないようにしたいと考えています。

近畿大学・山本圭純（主将）

「置かれた場所で咲きなさい」
高校の頃担任の先生から言われた言葉です。

国士館大学・岡田太陽（主将）

「生涯現役」
特に座右の銘を意識して生活をしていないが、強いてあげるなら。自分が合気道を続けたいと思う理由の一つには健康的に長生きしたいというのもあるからだ。自分の人生に見切りをつけることなく最後まで生き抜きたいという気持ちから、この「生涯現役」という言葉を度々意識している。

上智大学・伊藤広太郎（主将）

人事を尽くして天命を待つ

成城大学・星野文哉（主務）

「明日やろうはバカヤロウ」

この言葉は、怠け癖のある自分への戒めとして心に刻んでいます。「今日は気分が乗らない」「疲れているから」——そんな理由で稽古を休もうとすることもあります。でも、そうして今できることを先延ばしにしているうちに、気づけば四年間はあっという間に過ぎてしまいます。だからこそ、「明日やろうはバカヤロウ」。今日やるべきことは今日のうちに。自分を律し、今この瞬間を大切にするための言葉です。

専修大学・黒沢勇斗（主将）

「継続は力なり」

東京大学・今城宏都（主将）

「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」

これは勉強や人間関係など、日常のあらゆる場面で大切な心構えですが、合気道においても大切だと感じています。相手の体の軸や呼吸を感じること、さらには技の理合を理解することこそ「彼を知る」ことであり、また「己を知る」ことで自分の体をコントロールすることが、合気道において重要な姿勢であると考えています。

東京医科大学・村田泰葉（副将）

「人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短い。」

富山大学・清水昭伸（主将）

「心の底から本気で信じていれば絶対夢は叶う」（某駅駅長）

私のバイト先の駅長が以前私にかけてくれた言葉で、きつい時や、無理だろ！と思う状況でもこの言葉を思い出してなんとか乗り切っている。一見すると無理そうなことでも、それを実現するために本気で考えて頑張ることが大切だと気づかせてくれる言葉だと思う。なんかわたしごときが語ってすみません。

中央大学・橋本和弥（主将）

「鷹は死すとも穂はつまず」

高貴な人間はどんなに困窮しても不正なことはしないという意。自身の名前にも「鷹」の一文字が入っており、同じくその名を冠した「能ある鷹は爪を隠す」よりも中二病感が強くて好み。私自身は手段を選ばない人間なので困窮したらカラスのように何でも食い漁ると思う。そのギャップもあり、常に心に留めているお気に入りの言葉。

明治大学・佐野鷹融（外務）

「為せば成る」

どんなことにも臆せずチャレンジすることで、自分の実力を高めることに貪欲でありたいという思いを込めています。

早稲田大学・坂井拓海(主将)

3．合気道をしていなかったら何をしていたと思いますか。

当初、大学を卒業したら商社に入り、ゆくゆくは海外に出て仕事をしたいという夢がありました。結果的に師匠である富木師範のお声掛けにより斯道を歩むことに決断した訳ですが、仮に合気道以外の仕事を選択したとしても、やはり合気道は生涯続けたと思います。

成山哲郎　先生

「たら・れば」については明確な回答をすることはできないが、柔道整復師の道に進んでいた可能性はあります。

大森竜一　先生

柔道専念か!?、もしくは何かの古流の武術（おそらく剣術）に精を出していたかもしれませんし、或いは絵描きに凝って、また漫画家を目指していたかもしれません。

佐藤忠之　先生

社会人になって最初に勤めた銀行を続けていたかも知れません。その後、渡米して勤めた貿易の会社にいたかも知れません。しかし、そのどれを生業にしたとしても合気道はしていたとおもいます。いまは自ら選び、生業にすることとした合気道専従者としての道を大切に過ごしております。

酒井進之介　先生

特にありません。

宇田川哲哉　先生

合気道の稽古の一環としてやるべきなのかも知れませんが、剣術をやってみたいです。

谷繁強志　先生

古武術か中国武術

宇都宮正敏　先生

合気道をしていなかったら、バレーボールサークルに入っていたと思う。高校生のときはバレー部に入っていたのでそのまま続けていたと思う。

金沢大学・藤江敦也（主将）

私自身、合気道をやっていなかったら部活のようなひとつの事でなく、違うスポーツや芸術鑑賞などの幅広く様々な事を体験していくような大学生活を送っていたと思います。

京都産業大学・福井佑京（副将）

もし合気道をしていなかったとしても、体育会系の部活動に所属していたと思います。私自身、目標を立てて達成するために頑張ることが好きなので、それを一番実感しやすい体育会の部活動を選んでいたと思います。興味があるのは弓道や居合道などで、どのみち武道をやることには変わりなかったです。

近畿大学・山本圭純（主将）

中学の時剣道をやったことがあるので剣道をやっていたと思う。

国士舘大学・岡田太陽（主将）

他の体育会系の部活に入ることはなかったと思うので、英語のディベートをする団体に所属していたと思う。合気道以外の武道に興味を持つこともなかったはずだ。小説を書いたり翻訳をしたりするのが好きなので、そちらをもっと熱心に取り組んでいたかもしれない。

上智大学・伊藤広太郎（主将）

陸上競技

成城大学・星野文哉（主務）

合気道をやってなかったら、たぶんダンスしていたと思います。もともと洋楽が好きで、好きな曲に合わせて踊ってみたいなってずっと思っていました。体を動かすのは好きだし、音楽に乗って自由に表現するのって楽しそうですよね。いつかダンスにも挑戦してみたいです。

専修大学・黒沢勇斗（主将）

キックボクシングをやっていたと思う。実際、二年生に上がる時に体験に行くなど、合気道部との兼部も前向きに検討していた。ただ、いざ体験に行こうとした２日前に、基本太刀二本目の切り結びで中指を思いっきり打たれ、中指の第三関節に３センチほどのたんこぶができてしまった。その結果体験ではミットを打てず、見ているだけで飽きてしまい、入部には至らなかった。いつかスパーリングとかやってみたい。

中央大学・橋本和弥（主将）

運動なら剣道、学業なら競技プログラミングの勉強を本格的に

東京大学・今城宏都（主将）

もし合気道をしていなかったらアルバイトや旅行などに時間を使っていたのではないか思います。しかしその場合でも、合気道のように自身を見つめ打ち込めるものに注力していると考えています。

東京医科大学・村田泰葉（副将）

大学で部活を始めるにあたり合気道以外に山岳部かサイクリング部に入ることを検討していました。もし合気道部に入っていなかったら、どちらかの部に入っていたと思います。

富山大学・清水昭伸（主将）

幼少期少し習っていた空手をやっていたかも。合気道部に所属する前はマーケティングについて皆で学ぶ文科系のサークルに所属しており、そちらを続けていたかもしれない。辞めた理由は皆で議論して話をまとめて、大勢に発表するのが結構面白かったから。私自身、好きなことや楽しいと思ったことは長続きしない。合気道は受け身や稽古は基本楽しくないが、それを続けた先の大会などで少し面白みを感じられるため続けている。

明治大学・佐野鷹融（外務）

最近トレーニングにはまっているので、もしかしたらボディービルダーとか目指していたかもしれません。

早稲田大学・坂井拓海（主将）

4. 学生に一言お願いします。

学生の皆さんには出会いの大切さを知って頂きたいと思います。昭道館は今年で創設五十八年となります。多くの方との出会いが無ければ今の昭道館はありません。富木謙治先生、大庭英雄先生、小林裕和先生、そして富木先生の理想に共鳴され、私財を擲って道場建設を実行された内山雅晴初代昭道館理事長と御令室の内山シマエ二代目理事長。今や恩師、恩人は泉下の客となりましたが、今でもその御遺志は私をはじめ、後に続く者の心に生き続けております。本連盟での出会いが皆さんの人生を豊かにすることを信じております。

成山哲郎　先生

過ぎ去った日々はとり戻せないので、後悔しないように現在を精一杯生きてください。

大森竜一　先生

情報氾濫の今日ですが、恰も本当の如く報道されている情報にも、実は潜在する虚偽や欺瞞の姿があります。これを見抜く自身の目と心を養って下さい。深く自己の心を見つめてその声なき声を聞き、その心で何が真実なのかを?五感全てを使って、その真実に遭遇できたら幸いです。無心の稽古はその為のものだと思います。

佐藤忠之　先生

合気道にかかわらず、一度自ら決めたことに真剣に取り組むこと。

酒井進之介　先生

一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ、只一燈を頼め

言志四録　佐藤一斎

宇田川哲哉　先生

合気道は心と体をコントロールする究極の武道です。体だけ鍛えても真の強さを身につけることは叶いません。心身を共に鍛え、磨き、強さを極めましょう。

谷繁強志　先生

合気道がある生活を楽しんでください

宇都宮正敏　先生

楽しい日だけでなく、辛い日もあると思いますが、仲間たちと一緒に乗り越えて頑張っていきましょう!思い返せば充実した日々になっていると信じています。

金沢大学・藤江敦也(主将)

大学生の今だからこそ、自分の「やってみたい」を大切にしてほしいです。気になることは、挑戦し、失敗しても大丈夫です。もちろん部活だけでなく幅広い事でもやりたいことをやるのが一番です。それが自分の中身を作る材料になります。自由に動けるこの時間を、思いきり楽しんでください。

京都産業大学・福井佑京（副将）

合気道をする中で、知らないことや大変なことなどたくさんあると思いますが、一回一回の経験が自分の成長を感じることができる場になるので、とにかく合気道というスポーツを楽しんでください！

近畿大学・山本圭純（主将）

合気道を通して学んだ事、出会って仲良くなった人が多くできました。大学生活でぜひ合気道をやってみてください。

国士館大学・岡田太陽（主将）

合気道の技術や戦うことはもちろん私も好きだが、個人的には合気道の理念も同等に興味深いものであると考えている。「合気道で一番強い技は自分を殺しにきた相手と仲良くなること」という言葉が、私が師範に教えられて一番印象に残っている言葉で、今では普段の学生生活の中でも意識するようになった。合気道の稽古をしている人たちには、技術の研鑽に励みつつも、ぜひその歴史や考え方にも手を伸ばしてみて欲しいなと思う。

上智大学・伊藤広太郎（主将）

切磋琢磨できる仲間がいるというのはとても恵まれていることだと思いますので、その環境に感謝して稽古をしていきたいものです。

成城大学・星野文哉（主務）

合気道は、稽古した分だけ確実に上達します。技も体の使い方も、少しずつ積み重ねることで身についていくものです。でも、学生生活の四年間は本当にあっという間で、振り返ると「もっと稽古しておけばよかった」と感じることもあります。日々の稽古は地味で大変なこともあるけれど、その積み重ねが自分を強くしてくれる。今の時間を大切にして、悔いのない合気道ライフを送ってください。

専修大学・黒沢勇斗（主将）

是非中央大学合気道部と合同稽古をしてください！！
人数が多すぎて道場に入りきらないかもしれませんが。。。

中央大学・橋本和弥（主将）

わかりやすい成長は感じづらいかもしれませんが、稽古した時間は裏切りません。楽しいことを見つけて続けて欲しいです。

東京大学・今城宏都（主将）

合気道から得られる学びは私生活に活きることが多くあります！特に合気道の精神と美しい作法が身につくことがとても魅力ですのでぜひ一緒に学びましょう！

東京医科大学・村田泰葉（副主将）

何かを続けていると、嬉しいこともあれば、苦しくて挫けそうになることもあります。そうなってしまうのは、一つの出来事に心がとらわれているからかもしれません。過去を振り返ってみれば、辛いことばかりではなかったはずです。嫌なことに気を取られて努力を手放すのはもったいないことです。たとえ困難なことがあったとしても、続けることには必ず意味があります。

富山大学・清水昭伸（主将）

いつもありがとう。私にとって、合気道以上にこの部で皆と一緒に過ごす時間が好き嫌いの尺度を超えたかけがいのないものです。他の部員にとっても合気道部がそういった存在であれるよう、そしてその先で大会などでも結果を残せるよう、これからもよろしくお願いします。

他大学の合気道部の方は同じ武道を学ぶ者同士、今後も末永いお付き合いをよろしくお願いします。

明治大学・佐野鷹融（外務）

もし私たちの日頃の稽古に興味がありましたら是非ご連絡ください、一緒に楽しく稽古しましょう！

早稲田大学・坂井拓海（主将）

五、加盟校連絡先

大阪商業大学合気道部	〒577-0036	大阪府東大阪市御厨栄町 4-1-10
金沢大学体育会合気道部	〒920-1164	石川県金沢市角間町
関西福祉科学大学合気道部	〒582-0026	大阪府柏原市旭ヶ丘 3-11-1
京都産業大学体育会合氣道部	〒603-8047	京都府京都市北区上加茂本山
近畿大学合気道部	〒577-0805	大阪府東大阪市宝持 3-33-35
国士館大学合気道部	〒195-0052	東京都町田市広袴町 844
上智大学体育会合気道部	〒102-8554	東京都千代田区紀尾井町 7-1
成城大学合気道部	〒157-0066	東京都世田谷区成城 6-1-20
専修大学体育会合気道部	〒214-0033	神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1
大正大学合氣道同好会	〒170-8470	東京都豊島区西巣鴨 3-20-1
拓殖大学麗澤会体育局合氣道部	〒193-0085	東京都八王子市館町 815-1
中央大学学友会体育連盟合気道部	〒192-0393	東京都八王子市東中野 742-1
帝京大学理工学部合気道部	〒320-0351	栃木県宇都宮市豊郷台 1-1
天理大学体育総部合気道部	〒632-0032	奈良県天理市杣之内町 1050
東京大学運動会合気道部	〒113-0033	東京都文京区本郷 7-3-1
東京医科大学体育会合気道部	〒160-0023	東京都新宿区西新宿 6-1-1
富山大学体育会合気道部	〒930-0887	富山県富山市五福 3190
明海大学合気道部	〒279-0014	千葉県浦安市明海 1 丁目
明治学院大学体育会合気道部	〒108-0071	東京都港区白金台 1-2-37
明治大学体同連合気道部	〒101-0062	東京都千代田区神田駿河台 1-1
横浜国立大学合気道部	〒240-8501	神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-1
早稲田大学体育局合気道部	〒169-0051	東京都新宿区西早稲田 1-6-1

六、歴代幹部名簿

１期（昭和３４年）
亀井静香　東京　委
井上強一　中央

２期（昭和３６年）
若狭　博　中央
尾崎　駿　東京
倉田　出　東京

３期（昭和３７年）
小林昭彦　中央
小暮　登　東京

４期（昭和３８年）
柳奥和浦　中央
大場　勉　東京
吉岡卓也　拓殖　副

５期（昭和３９年）
小沢　勲　　　委
川上太一　中央　副

６期（昭和４０年）
山本柳二　拓殖　委

７期（昭和４１年）
芦田利昭　専修　委
金子正勝　明学　副
相原伝次　中央　会
飯塚征毅　早稲田　会

８期（昭和４２年）
西野　充　東京　委
工藤弘道　早稲田　副
増田芳久　中央　副
小林正行　明学　会
堀田武治　専修　渉

９期（昭和４３年）
川辺順一　明学　委
久和原凡生　専修　副
小林　茂　成城　副
田中明彦　中央　会
森実邦明　早稲田　渉
浜口清人　拓殖　総
河内　永　東京　企
大塚誠一　日本　企

１０期（昭和４４年）
福本　強　専修　委
藤平忠則　中央　副
吉田淳一　明学　副
竹内芳人　早稲田　会
玉井英夫　拓殖　会
千葉一彰　東京　総
勝亦　進　成城　企
藤本藤二　日本　企

１１期（昭和４５年）
真貝　栄　明学　委
加来健一　成城　副
川口永一　早稲田　副
佐々木均　専修　会
松尾　隆　日本　渉
藤野泰男　東京　記

１２期（昭和４６年）
石川和夫　早稲田　委
大久保律雄　拓殖　副
小出　豊　明学　副
中田英昭　東京　会
田下啓一　専修　記
吉田秀一　日本　渉
松井　明　成城　企
吸地重雄　中央　総
平井敏信　明星　幹
立花英昭　桜美林　幹

１３期（昭和４７年）
宇田悦貴　拓殖　委
権代憲策　中央　副
相坂謙悦　専修　副
熊坂　栄　明学　渉
小出英雄　日本　総

１４期（昭和４８年）
赤泊英哉　中央　委
蟹江良一　拓殖　副
堀　英博　明学　副

山内正雄　東京　会
竹内忠洋　専修　記
平沢　純　成城　渉
森田泰弘　日本　企
難波秀記　桜美林　幹

15期(昭和49年)
佐藤雄司　成城　委
市川雅康　拓殖　副
白鳥幸敏　明治　副
吉野　隆　中央　会
鈴木達次　専修
根本雄一　東京　副
小谷康幸　明学
飯田　博　早稲田

16期(昭和50年)
中神雅人　中央　委
半司知巳　東京　副
藤田世潤　早稲田　副
坂井　豊　明治　会
小宮公則　日本
飯山浩吉　成城

17期(昭和51年)
吉川英夫　早稲田　委
鈴木太郎　明学　副
江口和親　明治　副
渡辺明仁　専修　会
金山栄吉　拓殖　総
三浦弘至　桜美林　渉

18期(昭和52年)
竹下克美　専修　委
館山　武　拓殖　副
小口誠作　中央　副
小林顕彦　中央　副
加藤大和　中央　幹
笠原　均　成城　企
田中　保　明治　総

19期(昭和53年)
筑茂重仁　中央　委
宮本正雄　早稲田　副
寒河江正人　日本　副
河合正行　専修　会
塚本修久　明治　渉
斉藤義明　拓殖　幹
加藤頼義　明学　総
和田達夫　東京　記

20期(昭和54年)
大川雄一　専修　委
井川裕行　早稲田　副
三瓶美憲　桜美林　副
公文寛朗　専修　会
江藤尚志　成城　幹
三宅宏司　中央　総
平野行孝　中央　総
寺川富啓　中央　総
関根　宏　拓殖　企
寺戸　忠　明学　企

21期(昭和55年)
八巻　稔　拓殖　委
菊池　傑　中央　副
松尾重巳　桜美林　会
大森新一郎　中央　企

22期(昭和56年)
今泉美保　早稲田　委
芽根正宏　中央　副
越智信喜　東京　副
高橋清一　中央　幹
古川浩之　明治　会
根来俊久　東京　総
吉沢賢　中央　総

23期(昭和57年)
浅田　毅　中央　委
松沢　宏　早稲田　副
大谷知末　東京　副
上岡由起男　明治　幹
上溝武則　専修　会

24期(昭和58年)
増山輝義　明治　委
石田俊正　東京　副
辻　伸晃　早稲田　副
大塚俊之　拓殖　幹
小野重光　中央　会
三原恵理子　中央　書

（旧須藤）大津寿美　専修　企

25期（昭和59年）

畠山裕弘　専修　委

谷田辺浩　早稲田　副

武田裕二　東京　副

内藤健一　早稲田　幹

村松正朗　中央　会

田辺和弘　明治　企

松本雄造　中央　総

26期（昭和60年）

保木俊司　拓殖　委

小沢仁志　早稲田　副

伏田広幸　中央　副

小暮喜一　明治　幹

川鍋清隆　明学　企

岩崎貞明　東京　会

27期（昭和61年）

平野勝己　明治　委

菅原龍男　東京　副

谷村直城　早稲田　副

藤生幸男　早稲田　幹

大宮千秋　専修　会

日野孝幸　中央　企

28期（昭和62年）

田中正也　東京　委

渋谷勇治　中央　副

前田浩二　明学　副

辻　善行　拓殖　幹

平岡義淳　専修　会

小嶋秀徳　早稲田　企

29期（昭和63年）

小桧山英太郎　早稲田　委

日向知史　拓殖　副

大貫成美　専修　副

平田経一　東京　会

刀川勇一　中央　企

30期（平成元年）

辻　伸吾　上智　委

神谷広幸　東京　副

伊藤敏郎　専修　副

藤岡拓治　拓殖

橋本喜久　中央

西尾　努　明学

山本征司　早稲田

31期（平成2年）

末廣丈男　専修　委

児玉晃治　上智　副

鈴木美輝　早稲田　副

実石利幸　拓殖　幹

葛山　宏　中央　会

鏑木恵子　中央　書

32期（平成3年）

蓮香正英　東京　委

圖師守和　中央　副

羽鳥秀介　早稲田　幹

関ひろ美　上智　会

宇野達雄　専修

石川敦子　拓殖

33期（平成4年）

圖師守和　中央　副

羽鳥秀介　早稲田　幹

関ひろ美　上智　会

蓮香正英　東京

宇野達雄　専修

石川敦子　拓殖

但野端子　中央　書

34期（平成5年）

矢口朋来　東京　委

小林賢一郎　東京　副

高木辰徳　拓殖　副

吉本　薫　専修　幹

石川正和　中央　会

中里見真理　上智　書

中里清乃　中央　総

35期（平成6年）

清水寿哉　拓殖　委

市丸　徹　東京　副

田中茂樹　中央　幹

鈴木克敏　東京　会

高木恭子　中央
神谷以土子　拓殖
鴨沢義勝　上智
小野寺公子　金沢

３６期(平成7年)
荒井剛　中央　委
奥山英男　明治　副
中　真生　東京　副
永田泰三　拓殖　幹
千葉陽一　東京
溝口義郎　早稲田
菅野貴裕　専修

３７期(平成8年)
小林賢一郎　東京　委
櫻木淳一　明治　副
岸本有巨　中央　幹
大畑千春　東京
宮越亜佐子　中央
安達　愛　上智

３８期(平成9年)
河口大輔　東京　委
植田　修　中央　幹
大武美保子　東京
守山美樹　中央

３９期(平成１０年)
大西　繁　専修　委
小原圭介　東京　副
荒井美乃　東京　書
井上和靖　東京
大野久美子　中央
川田　晃　拓殖

４０期(平成１１年)
丸田英徳　中央　委
永井祐介　上智　副
野一色泰友　東京　副-会
村田英幸　拓殖　幹
増本　浩　明治　総
増田与志子　東京　書
八波直登　専修

４１期(平成１２年)
荒川大地　専修　委
井田篤志　拓殖　副
松浦妙子　東京　副
鈴木雄大　東京　会
松村　陽　上智　幹
中山章太郎　明治　総
中原桃絵　中央　書
武井　誠　中央

４２期(平成１３年)
鈴木雄大　東京　委
北条隆夫　中央　副
松原　誠　拓殖　副
二見崇史　東京　総
増田賢司　上智　幹
木畠千端子　中央　人
鈴川真世　専修　書
佐藤有紀　明治　渉
五十嵐洋介　東京　会

４３期(平成１４年)
五十嵐洋介　東京　委
鈴木宏治　拓殖　副
犬塚　彩　中央　副
百井美由紀　拓殖　幹
大内直人　専修　総
大林直樹　中央　企
宮島　望　東京　渉
寺保美有紀　専修　書
羽鳥　敦　中央　会

４４期(平成１５年)
猪俣洋右　拓殖　委
羽鳥　敦　中央　副
糟谷綾子　明治　副
斉藤智子　中央　幹
北村真希子　拓殖　総
外間実樹雄　専修　編
久須美千晶　中央　渉
佐藤友子　東京　渉
前田昭平　専修　会

45期(平成16年)
前田昭平　専修　委
戸田洋介　拓殖　副
赤芝有紀　中央　副
片岡　伸　明治　幹
福村晃弘　東京　総
南山泰之　中央　編
浅田真理　英和　渉
石毛剛臣　明治　渉
横山美尋　専修　企
五十嵐俊輔　専修　会

46期(平成17年)
加藤真弓　中央　委
村上雅俊　拓殖　副
五十嵐俊輔　専修　副
五十里奈央　拓殖　幹
杉山絢香　東京　総
柏原一輝　東京　編
齋藤敏道　明治　渉
石原祐一　中央　内
森田宙花　明治　書
永田拓也　拓殖　会

47期(平成18年)
永田拓也　拓殖　委
堀　孝吉　中央　副
石幡絵美子　明治　幹
町田　大　専修　内
水中敬子　中央　渉
本間沙弓　専修　総
廣瀬英治　拓殖　渉
橘高佳恵　東京　シ
児島亮平　東京　編
斉木佳奈　英和　渉
児玉朱美　英和　会

48期(平成19年)
大庭康裕　東京　委
鍵元美穂　専修　編
成田正一　中央　幹
橋枝俊　明治　総
諸橋憲生　拓殖　渉
越元健太　拓殖　渉
西　沙織　専修　内
竹本千尋　東京　編・シ
児玉朱美　英和　会
藤野久美子　英和　補

49期(平成20年)
成田正一　中央　委
込山裕太　拓殖　副
酒井拓斗　明治　渉
安達智子　中央　広
児玉朱美　英和　名
衣川卓宏　東京　情
西本佳加　東京　編
藤野久美子　英和　会
西　沙織　専修　補

50期(平成21年)
沢柳賢二　専修　委
中庭雅子　中央　副・広
酒井拓斗　明治　副・渉
石山誠之　拓殖　渉
大和田明子　英和　名
小林数磨　専修　編
木下清隆　東京　編
森元鷹志　中央　情
黒瀧すずか　東京　会

51期(平成22年)
小金井巧　中央　委
西田健太郎　東京　副・広
久万純平　明治　渉
平田高嗣　拓殖　名
齋藤光雪　専修　情
松井　淳　東京　編
藤牧あゆみ　中央　会

52期(平成23年)
上里允隆　拓殖　委
秋山摩利　中央　副・幹
勝木洋臣　東京　副・渉
岩崎裕久　専修　渉
河村麻梨子　東京　会
青木真理恵　英和　補
中田博之　中央　編
楠見亮平　明治　名
銭谷聖文　拓殖　情

53期(平成24年)
浜井　優　東京　委
中村義人　中央　副・幹

石田真将　拓殖　副-渉
多田啓人　東京　会
渡邊康平　明治　名
浅川拓哉　専修　渉
金内友里　英和　情
青木那広　専修　編

５４期(平成２５年)

丸山貴之　中央　委
北川なつき　東京　副-管
近岡　光　専修　副-渉
大久保荘一　東京　会
山本恵未　中央　編
伊禮巧真　専修　渉-補
大川未紗子　英和　情
落合成昭　拓殖　幹
河合慶太　明治　名

５５期(平成２６年)

望月淳平　専修　委
高取　慧　専修　副-渉
鈴木貴裕　中央　副-編
堀松知剛　東京　会
福伊永花　東京　管
日野皓文　拓殖　情-幹
船木翔太　明治　名

５６期(平成２７年)

中西亮介　東京　委
村中礼菜　東京　副-編
小島知樹　専修　副-幹
高石　治　専修　渉
三軒家綾香　明治　名
武塚直也　早稲田　管
岡田啓太朗　中央　情
石井豪浩　拓殖　会

５７期(平成２８年)

岡田啓太朗　中央　委
石井豪浩　拓殖　副
小野沙耶　明治　副-名
小早川みづき　中央　編
三田眞貴子　早稲田　管
石塚幹菜　東京　渉
塚田裕介　東京　会
人見優斗　専修　情
中田　恵　専修　編

５８期(平成２９年)

河合萌子　東京　委
中田　恵　専修　副-編
橋本佳奈実　明治　副-名
八城裕樹　東京　会
人見優斗　専修　管
下地　匡　中央　渉
中村達哉　専修　情

５９期(平成３０年)

小川希生　早稲田　委
大島康輝　明治　副-渉
遠藤功司　東京　副-編
今西浩人　東京　会
中村達哉　専修　情
笠谷佳範　中央　名

６０期(平成３１年)

飯塚浩祐　専修　委
藤本侑花　中央　副
迫本和也　早稲田　渉
宮脇英佑　早稲田　編
森海　翔　東京　会
笠谷佳範　中央　名
栄田由貴　専修　情
長縄礼香　東京　広
治郎丸諒　明治　幹

６１期(令和2年)

味園瑞萌　中央　委
大久保拓紀　明治　副
藤澤留依　中央　渉
松家京平　早稲田　編
西明日香　東京　会
伊藤千瑛　早稲田　名
与那城竜太郎　専修　情

６２期(令和3年)

飯島武　中央　委
森　美鈴　明治　副
長尾太玖海　東京　会
保坂茅陽　中央　渉
萩　裕斗　専修　情
刈谷慧斗　専修　情

６３期（令和４年）

池田将吾	東京	委
釜谷明英	明治	副-編
磯部　望	中央	渉
石田龍之介	中央	渉
井手正人	東京	会
若旅雅弥	早稲田	情
高野郁大	拓殖	情

６４期（令和５年）

佐々木玲音	専修	委
藤丸晃浩	東京	副-編
小林千紗	中央	渉
前田亜由香	東京	会
赤根広海	中央	広
荒川将一	早稲田	情
櫻田碧海	拓殖	情
真栄城玄規	明治	情
岡田太陽	国士舘	情

６５期（令和６年）

山本佳奈	中央	委
眞榮城玄規	明治	副
徳竹道大	専修	副-編
橋本和弥	中央	渉
大友彩凜	東京	会
岡田太陽	国士舘	情
谷口紗梨	早稲田	情
篠崎一輝	国士舘	情補
岡　陽太	中央	渉補

６６期（令和７年）

矢崎　快	中央	委
明石英里	東京	副-編
谷口紗梨	早稲田	副-編
徳竹道大	専修	渉
飛田夢仁	東京	会
佐野鷹融	明治	情
原田栞里	中央	情

七、全日本学生合気道連盟規約

全日本学生合気道連盟規約

施行　昭和三十四年
改正　平成二十年九月十日

第一章　総則

第一条（目的）
本連盟は学生間における合気道の普及発展と、連盟校相互の連絡並びに互いの親睦融和を図り、学生合気道の発展に寄与することを目的とする。

第二条（流派）
流派はこれを問わない。

第三条（名称及び事務所）
①本連盟は全日本学生合気道連盟と称する。
②本連盟は事務所を日本武道館内　に置く。

第四条（事業）
本連盟は第一条の目的を達成する為に以下各号所定の事業を行う。
一、演武会
二、合同合宿
三、演武旅行、合同稽古、刊行物の発行
四、その必要と認められる諸事業

第五条（構成単位）
本連盟は各大学公認の合気道部、又は連盟委員会によってこれに準ずると決議された合気道会の大学単位を以って構成する。

第二章　加盟及び脱退

第六条の一（加盟）
①連盟加入に当っては、第七条に定める書類を事務所に提出しなければならない。
②新規加盟は連盟委員会による審議を経た後、十六条二項に定める議決により効力を発する。
③委員長は、前項の審議を行うために、書類の提出から二週間以内に委員会を招集しなければならない
④第五条後段に当たる大学を加盟させるに当たっては、正式加盟までの一定期間、これを準加入とすることができる。

第六条の二（脱退）
①六条の一の一項ないし三項の規定は、任意脱退の場合に準用する。

②連盟委員会は、第二十四条一項各号に当たる加盟校を強制的に脱退させることができる。

第七条（登録）

①加盟校は毎年、以下各号の連盟事務所へ文書を以って提出することを要する。

一、名称

二、所在地

三、連絡場所

四、加盟校規約

五、本年度役員氏名、住所、連絡先

六、行事日程

七、加盟員名簿

八、その他必要と認められる諸事項

②前項の提出は、電磁的方法により行うことができる。

第三章　機関

第一節　総則

第八条（機関）

①本連盟は常時、第二節に定める連盟委員会を置く。

②本連盟は、必要と認める場合に顧問及び最高顧問を置く事ができる。

③前項顧問及び最高顧問は、連盟委員会の決議を経て、委員長がこれを委嘱する。

第九条（任期）

①任期は一年とする。但し任期中に交代する場合は、後任者の任期は前任者の残余の任期とする。

②再任はこれを妨げない。

第十条（顧問）　削除

第十一条（最高顧問）　削除

第二節　連盟委員会

第十二条（連盟委員会）

①連盟委員会は、連盟の最高機関である。

②連盟委員会は、本連盟事業計画の立案及び実施を行う。

第十三条（構成）

①　連盟委員会は、連盟委員によって構成される。

②　連盟委員は、加盟校より選出される。

③　連盟委員会は、委員長一名、副委員長二名を定める。

④　削除

第十四条（担当委員）

連盟委員会は、以下各号に定める担当委員を置く。

一、渉外
二、広報
三、名簿
四、情報管理
五、編集
六、会計

第十五条（委員会）

①連盟委員会は毎月一回、定例委員会を開く。

②委員長が必要と認めた場合には、緊急委員会を召集する。

第十六条（定足数及び議決）

①連盟委員会は委員の三分の二の出席により成立する。但し、委任状も可とする

②連盟委員会の議決権は、各委員につき一票とし、議決は出席委員の過半数により成立する。賛否同数の場合は、委員長の決定するところによる。

第三節　任務

第十七条（任務）

①委員長は連盟を代表する。

②副委員長は委員長を補佐する。

第十八条（誠実義務）

連盟委員は任務を迅速かつ誠実に行わなければならない。

第四章　会計

第十九条（経費）

連盟の経費は、加盟費、分担金、寄付金、その他の収入を以って充てる。

第二十条（会計年度）

会計年度は毎年十一月に始まり、十月に終る。

第二十一条（予算）

予算は、会計担当委員が之を作成し、連盟委員会の承認を得る事を要する。

第二十二条（決算）

決算は、会計担当委員が之を作成し、連盟委員会の承認を得る事を要する。

第二十三条（細則）　削除

第五章　罰則

第二十四条の一（罰則規定）

連盟委員会は、以下各号に定める処分を行うことができる。

一、強制脱退
二、権利停止
三、警告

第二十四条の二（脱退）

①連盟委員会は、以下各号に該当する加盟校を、強制的に脱退させることができる。

一、連盟の威信を著しく傷つけた場合。
二、連盟の規約に違反した場合。
三、連盟と他団体の関係を著しく悪化させた場合。
四、その他不適当と認められる場合。

②脱退処分を行う場合には連盟委員会は直ちに調査委員会を組織し、之を調査することができる。

第二十五条（復権）

除名処分校の復権は、十六条二項に定める決議による。

第六章　改正

第二十六条（改正）

本規約の改正には、連盟委員総数の三分の二以上の同意を要する。

編集後記

まず始めに、本年度の連盟誌発行にあたり多大なるご協力を賜りました先生方、加盟校の皆様、スポンサーの皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私にとりまして初めての編集作業であり、至らぬ点も多々ございましたが、副委員長の明石をはじめ、渉外を含む連盟委員一同の支えにより、こうして無事発行へ至ることができました。

本誌は、先生方や加盟校の皆様からの寄稿によって形作られるものであり、流派の違いを超えて合気道への真摯な思いを共有できることを改めて実感いたしました。

また、特別企画ではいくつかの質問にお答えいただきました。先生方や各校の皆様のお考えに触れられたことで、本誌をより一層思い出深く、意義深いものとしていただけたと存じます。

歴代幹部名簿に刻まれていく重厚な歴史の一頁に、当代も名を連ねることができました事は、誠に光栄であり、身の引き締まる思いでございます。

結びに、加盟校の更なる交流と、全日本学生合気道連盟の末永い発展を祈念し、編集後記とさせていただきます。

第六十六期編集責任者　谷口紗梨

連盟誌　第五十三号

令和七年一〇月一一日発行

発行責任者　矢崎　快
編集責任者　谷口紗梨

発行所　千代田区北の丸公園二-三
日本武道館学生武道クラブ内
全日本学生合気道連盟

印刷所　スピード冊子印刷.com
電話　〇一二〇(九三九)八三四
http://speed-books.com

毎日コムネットは
学生生活 応援団です！

学生時代の数年間は、さまざまな経験を通じて自分自身を磨いていく大切なとき。
毎日コムネットは、そんな皆さまのお力になりたいと願っています。
合宿旅行や住まいのご紹介から、皆さまの学生生活の入学から卒業、就職活動の支援までサポートします！

クラブ サークル
クラブ・サークル活動支援（合宿・大会企画）

合宿はもちろん、スポーツ大会等の運営や印刷物の作成等のクラブ・サークル活動支援をお引受けし、活気あふれる課外活動を全力でバックアップいたします。

合宿旅行.com　サッカー大会.com

就職
クラブ・サークル経験を就職に活かす

クラブ・サークル活動を通じて培ったコミュニケーション力は、学生時代のキャリアとも言えます。学生の持つ力をしっかり企業に伝える、そんな就職活動を応援します。

campus career

暮らす
学生マンションの運営・管理

不安と期待で始まるひとり暮らし。毎日コムネットの学生マンションは、快適でセキュリティも万全。入居者も同世代で安心です。しっかりした生活拠点作りを応援します。

学生マンション.com

お電話またはホームページよりお気軽にお問合せください

合宿旅行.com　合宿旅行.com 検索
サッカー大会.com　サッカー大会.com 検索
campus career　キャンパスキャリア 検索
学生マンション.com　学生マンション.com 検索

合宿・就職活動・住まい 学生生活をトータルサポート

毎日コムネット
https://www.maicom.co.jp
観光庁長官登録旅行業第1629号/JATA正会員
JPX STANDARD

▶合宿のお問合せこちらから
新宿旅行センター
〒163-1505 東京都新宿区西新宿1-6-1 新宿エルタワー5F
TEL 03-5322-0489

▶就職支援のお問合せはこちらから
Campusキャリア事務局
毎日コムネットグループ　(株)ワークス・ジャパン内
〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町2-2-2 神田パークプラザ
TEL 0120-850-122

祝　全日本学生合気道連盟誌　第53号

SAKURAYA

武道具デパート

株式会社　櫻　屋

〒102-0073　東京都千代田区九段北 1-3-4

ＴＥＬ：03-3262-1969

地下鉄　九段下駅　3b出口前

www.sakuraya.org

明治神宮　武道場　至誠館

〒１５１－８５５７
東京都渋谷区代々木神園町１－１

電話：０３－３３７９－９１３７